神は哀れな子羊に慈悲を与える

ハンバーグ派

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
神は哀れな子羊に慈悲を与える

【Ｎコード】
Ｎ９３８７Ｗ

【作者名】
ハンバーグ派

【あらすじ】
「魔術士と忘れし伝説」、「とある涙の召使い」の主人公、シズマ＝ラインズ。
とある理由で神に仕える彼が、次に飛んだ世界は「ＧＳ美神　極楽大作戦！！」の世界だった。
彼の悲しみを救う為、シズマがその世界でなすべき事は一体……。

上記の2作品を読んでもらえれば、主人公情報はわかりますが、なければないで楽しめると思います。

主人公紹介を参照下さい。

駄文、週一位の投稿ペースになると思います。

第一章、昔々ある所に……。（前書き）

召喚士シズマ＝ラインズシリーズ第二段です。

投稿ペースはかなり遅くなりますが、よろしくお願いします。

第一章、昔々ある所に……。

無の空間。

必要なものは考えるだけで出現する、神の住居。

そんな所に、とある理由でここに住まう神の戦士となった僕、シズマ＝ラインズはコタツに入って神の読み終わった漫画を読んでいた。

「シズマ君、そこ、行ってみたい？」

「ブラフマー様、唐突ですね……悲劇はあったけど、これは僕が手を出していい問題じゃないんじゃないですか？」

先程まで、はるか遠く（距離の概念なんてないけど）でストラックアウトをしていた僕の仕える主、創造神ブラフマー様（見た目幼女）が僕を楽しそうに見ていた。

その世界、つまり僕のやるべき事は様々な世界に渡り、なすべき事をする事。

つまりは……僕の読んでいる漫画の世界に行く？　と聞いているのだ。

因みに今読んでいる漫画は……「ＧＳ美神　極楽大作戦！！」だ。

主人公「横島忠夫」が、様々な成長をしながら最愛の女性の願いの元、その女性の命と引き換えに世界を救う話だ。

まあ、それは兎も角……問題は。

僕に恐怖公、アシュタロスと戦えと言うんだろうか？

様々な世界を渡って来たけど、流石に無理がありますよ？

それに今まで僕は、干渉はしても歴史の中までは大きく変えてはいない。

もしやるとしたら、僕は魔族ルシオラの命を救う。

そんな物語の根本を変えかねない大問題を起こすだろう。

それを許容するって事かな？

「その後も彼の苦難は終わらないんだよ。そのヨコシマ君はその後、反デタント派に襲われて魔族因子が覚醒、最終戦争が起こるよ」

「……なんて夢のない話だ」

恋人を亡くしてまで世界を救ったのに……救われ無すぎる。

「その最終戦争でも一人生き残り……一寸違うね。再生を繰り返し、神魔の指導者と肩を並べる力を手に入れる。そして、彼は魔人皇と呼ばれるようになる。彼の世界に救いを与える為に……行ってみない？　シズマ君も行くなら、そうしたいでしょう？」

「珍しいですね。特定の個人に対しての干渉を、ブラフマー様が容認するなんて」

いつもなら、渡った先で設定されてるマスターや、僕が勝手に認めた人間の心の願望を叶えるものなのに。

「へへへ……わかる？　そうだよね、私らしくないよねぇ」

照れるな。

頬を掻くな。

僕の何十万倍も年上じゃないか。

「そこの二人から打診があったんだよね」

「二人？　サッちゃんとキーやんの事ですか？」

ブラフマー様が指差した先には、僕が丁度読んでいたページの、アシュタロスの乱の最後に現れた双界の最高指導者の姿がいた。

「なんて打診だったんですか？」

「えっとねぇ、「わいらは、よこっちに何も出来んかった。せめて、別の世界のよこっちには幸せになってほしんや」と「私達は彼に不幸しか与える事は出来ませんでした。今ある時間軸に干渉するには、私達だけでは足りません。父なる神の貴女にも、力を貸してもらえないでしょうか？」って言ってたんだよ」

「はぁ、やっぱり、ブラフマー様は凄いんですね」

事情はわかった。

世界を移り変わって、強くなるのが僕のやりたい事であり仕事だから、異論はないんだけど……問題が一つだけ。

「それで僕ですか……まあ、構いませんが。でも、僕に神魔族と戦

えるような力はありませんよ」
「大丈夫だよ！　シズマ君は強いし。あの世界は世界間の差が少ないから、メドーサクラスなら赤子の手を捻る位のものだよ」
そんなものなんだ……流石に、明らかに神魔族と戦闘になる世界には行った事ないな。
僕の世界や、Ｆａｔｅの世界の神魔族に類する存在は、未だ逆立ちしても勝てる気がしないし。

「わかりました……僕はどのタイミングに飛ぶんですか？」
「原作一話からだけど、シズマ君も希望がある？」
そうだなぁ。
彼にはまず、真っ当な生活をしてほしい。
あの無茶苦茶な食生活を改善させないと……。
と、なると、美神令子をなんとかしないとな。
でも、唐巣神父にも出来なかったしね。
美神令子の守銭奴をなんとか……！？
そうか、美神美智恵か！
「過去に、美神母娘がハーピーに襲われた時がいいです」
「へえ、なる程。美神令子の価値観を変えるんだね。でも、その後はどうするの？」

そうなんだよなぁ。

僕も年をとらないから、人界にいると困るんだよなぁ。

そうか、じゃあ、妙神山にいこうか？

「イベント時期まで、妙神山に行きますよ。そういえば、双界で僕の事を知ってる人、じゃないや、神はいるんでしょうか？」

「多分、サッちゃんとキーやんは知ってると思うけど、他はどうかなぁ。シズマ君には干渉してこないと思うよ」

邪魔されないならいいか。

要所要所は気合いでなんとかしよう。

「よし、じゃあ、シズマ君の希望に沿って、ハーピーに美神母娘が襲われた所に送るね。

そうだ、今回は、原作なんて全く気にしないでいいから、ヨコシマ君の為にシズマ君も楽しんで来てね」

楽しんでって……まあ、いつもの事って言えばそうだけど……。

それに、先の予測がたてられないし、そんなにひどく原作ブレイクする訳にはいかないよね。

そして、僕は英雄横島に救いある世界を与える為、彼等の世界に渡った。

意識が急速に覚醒してくる。　どうやら、僕は公園にあるベンチに座っているみたいだ。

立ち上がる。

周囲を見渡すが誰もいない。

「まずは、美神母娘を探さないとな……ん？」

なにやら、向こうからギャーギャー金切り声が聞こえる。

「待つじゃん！　お前等はあたいが仕留めるじゃん！」

「くっ！　なんとか、誘い込まないと……」

見に行こうと思ったけど、それには及ばず、目の前を翼を生やした魔族と、子供を抱いた栗色の髪の母娘が駆け抜けていった。

「ドップラー効果で子供の泣き声か……どんだけ早く走ってるのさ？　まあ、手間が省けるな。でも、飛んですぐその時じゃなくてもよくない？」

まあ、これもブラフマー様流の親切なんだろうな。

「やれやれ。さて、ハーピーは魔族としては下級。自分の力を試すいい相手だな」

僕は投影魔術で、正体がばれないようにピエロの仮面とＦａｔｅのアーチャーのつけていたマント、赤原外套を投影して身に付ける。

ダークも投影すると、僕も後を追った。

「――振り切れないわ。追いつかれるのは時間の問題。なら、せめてこの子だけでも……」

迫るハーピーに対して、逃亡を諦めて美神令子を未来に送ろうと決意する美神美智恵。

今は晴れてるけど……当然、天候も理解してるんだろうな、彼女は。

「追いついたじゃん！　人間にしては中々すばしっこかったじゃん！　フェザー・ブレッド！」

ハーピーの翼から放たれた羽の矢を、神通棍ではじく。

しかし、子供を抱いたままの姿勢ではバランスが取れず、体制を崩す。

続けて放たれるフェザー・ブレッド。

回避するしかない美神美智恵は、徐々に追い詰められる。

「後三十分、いえ、十五分あれば……でも令子、貴女だけは死んでも助けてみせる！」

「所詮人間は人間じゃん！　あたいのフェザー・ブレッドを弾いたのは大したものだけど、そこまでじゃん。サヨナラじゃん美神美智恵！！　フェザー・ブレッド！！」

放たれたハーピーのフェザー・ブレッド。

逃げ場なしと見て、徹底抗戦の構えの美神美智恵。

初めから泣きっぱなしの美神令子（幼児）。

どこまで持つかわからないけど、歴史的に考えると自分でなんとかするんだろうな。

でも、恩を売るにはこのタイミングだな。

僕はハーピーと美神美智恵の間に飛び出す。

そして、フェザー・ブレッドをダークで打ち返した。

「おわっ！　危ないじゃん！　自分の羽でダメージを負ったら、末代までの笑い物じゃん！」

「……仮面？　貴方は？」

ちっ、運のいい奴。笑い物になればいいのに。

「って、何者じゃん、お前は！」
「格好いい……」
「令子、下がってなさい！」

三者三様の反応を返してくれる。

ハーピーは悪役然と、美神令子は戦隊物のヒーローを見たかのように泣きやみ、美神美智恵は僕も第三の敵対勢力と言う風な感じ。

「魔族ハーピー。今すぐ消えれば、見逃してあげるよ」
「人間如きがあたいのフェザー・ブレッドを、偶然弾いた位で何を調子付いてるじゃん！　まぐれ当たりなら、そこの美神美智恵もあったじゃん！　誰だか知らないけど、お前もまとめて消えるじゃんよ！　フェザー・ブレッド！」

まあ、実力を試す意味もあるから、素直に撤退されても困るんだけどね。

じゃあ、ハーピーには後悔してもらおうかな？

「きっと、十分後には、死んだ方がよかったと思うくらいに涙する事になるよ……さて、美神美智恵だね。正直足手まといだから、脇で震えててくれ」
「ーーなっ！」

わざと美神美智恵を挑発してから、ハーピーのフェザー・ブレッドを先程と同じように打ち返す。

「危ないじゃん！！　お前、プロの選手かじゃん！　反射の狙いが

正確すぎるじゃんよ！」
「……それも悪くないね」
「……令子、良い子だから一寸ここで待っててくれる？」
「うん、わかった。ママは？」
美神令子を下ろすと、神通棍を握り直す美神美智恵。
「あんなわけのわからない格好の変なのに貸しを作ったとあったら、美神の女が廃るってものよ」
「ママも戦うのね、頑張ってね」
「ええ、ママ、頑張るわ」
そんな人情ドラマを繰り広げてから、美神美智恵はこちらに向かってきた。
まあ、仮面を付けたちっさいアーチャーな訳だから、変なの扱いもわかるけど……って！
「誰がちっさいのだ！」
「おわっ！　なんじゃん！？　急に叫びだして……病院行った方がいいじゃん」
「余計なお世話だよ。君に最上の後悔を与える方が先だから」
「ねぇ、貴方。あれを引きずり下ろせる？」

美神美智恵が僕の隣に来て、そう聞いてきたのは、馬鹿の一つ覚えのようにフェザー・ブレッドを放ち続けるハーピーに飽きてきた頃だった。

やっと来たか。

僕としては、一寸遅いかなと思った位だった。

美神美智恵が来るまで、僕が何をしてたかと言うと……。

ハーピーがフェザー・ブレッドを撃つ。
僕がフェザー・ブレッドを打ち返す。
ハーピーがそれを回避する。

繰り返されるその一連の動作に、ハーピーの苛つきは最高潮。

ハーピーは黙々とフェザー・ブレッドを放ち続ける機械と化していた。
と、つまりはハーピーで遊んでいた訳だ。

想像より強くないな。
もっとフェザーブレッドは鋭くて、ハーピー自身も素早い動きで撹乱したりするかと思ったんだけど。

確かハーピーは特化型の魔族。

その飛行性とフェザーブレッドの威力、射程距離、隠密性から美神美智恵を抹殺する為に人界に来た筈。

やり方が駄目だったのか、美神美智恵が優秀だったのか……まあ、

両方かな？

でも、相対しているって事は、その時点で危険性は半減してると言える。

僕が魔族と戦える証明にはならないな、これは。

「出来るよ……貴女こそ、仕留められるの？　美神美智恵」

「私を知ってるなら、霊能者としての美神も知ってるでしょう？」

「……いいでしょう。じゃあ、見せてもらうよ」

二人でハーピーに対する位置取りをして、各々の武器を構える。

「美神美智恵！！　馬鹿な奴じゃん、こいつに任せて逃げれば、逃げ切れたものを……死ぬじゃん！　フェザー・ブレッド！」

放たれるフェザー・ブレッド。

二本位まとめて撃てば、まだ戦略の幅が広がるのに……才能の無駄遣いだよな。

「じゃあ、行くよ……」

ダークに魔力を込めて、また打ち返す。

「馬鹿の一つ覚えじゃん！　そんなのに当たる訳……ぎゃん！？」

回避行動後に、悪態をついていたハーピーが悲鳴をあげて落ちてくる！

視線だけで美神美智恵を促すと、準備万端とばかりに、恐らくは

渾身の力を込めた神通棍を叩きつけた。
「ぎゃあああああ！！」
「消えなさい！　魔族ハーピー！　美神美智恵が極楽に行かせてあげるわ！」
力量は充分。
これならハーピーを魔界に戻す事が出来るだろう。
でも、それだけじゃあ面白くない。
「はい、美神美智恵。そこまで」
「きゃっ！　あ、貴方、何するの！？」
「ママ、可愛い……」
ハーピーを消される前に、美神美智恵の首筋に手刀を入れて一時的に麻痺させる。
「お前、どういう事じゃん。あたいを助けて何を企んでるじゃん？」
「……わかる？」
「くっ、令子、逃げなさい！　このままじゃあ、貴女が……」
「ーーママ？」
不思議そうな顔をしたハーピーは、僕の笑顔を見て恐怖に顔をひきつらせながら逃げようとする。
「折角、現界を許したのに、逃がす訳ないでしょ？　発動、フェザー・ブレッド」

先程から、僕の撃ち返していた全てのフェザー・ブレッドが羽ばたこうとしていたハーピーを取り囲む。

「な、なんなんじゃん！？　なんであたいのフェザー・ブレッドが！？　どうなってるじゃん！？」

「まさか！　撃ち返したハーピーのフェザー・ブレッドに霊力を込めて、所有権を奪い取ったと言うの！？」

魔族は威力は高いけど、扱いが雑だから干渉するのは別に難しくないけど。

実際、ハーピーを落としたみたいに、回避直後に軌道を変えて直撃させる事が出来るし。

「さて、ハーピー？」

びくりと震えるハーピー。

「な、なんじゃん？　もう魔界に返してほしいじゃん」

「まあまあ、君、僕の召喚獣にならないかい？」

半泣きでへこんでるハーピーよりも、身動きの取れない美神美智恵の方が状況を把握出来てるみたいだった。

「魔族を使い魔にしようっていうの！？　本気なの！？」

「あたいを好きにしようっていうじゃん！？」

「選ばせてあげるよ。僕と契約を交わすか、魔界に送還されるか。僕といれば強くなれるよ」

「決まってるじゃん！　そんなの魔界に「魔界に送還される場合は、

封印を施した上に自らの羽で串刺しになるけど」……卑怯じゃん！
そんなの、選択の余地がないじゃん！」

まあ、僕が勝者な訳だから当然だよね。

でも、それだけじゃあ可哀想だし、一方的な契約は僕はしない主義だから……。

「僕と来れば、戻れるよ……昔の君に」
「……本当じゃん？　あの姿に戻れるんじゃん？」
「僕は絶対に約束を違えない。君を戻すと誓うよ」

じゃないと、妙神山に行けないし。

「……わかったじゃん。契約するじゃん」
「ん、ハーピー。君の判断は楽しいよ」

僕はハーピーの周囲からフェザー・ブレッドを消す。

出されたスキルを無理矢理取り入れていただけだから、消した時点でフェザー・ブレッドを僕は使えなくなった。

わざわざ言わないけど。

「さて、美神美智恵……」
「貴方、何者なの……魔族の技を奪い、契約を了承させ、堕天したハーピーを戻すと言う……人間じゃないの？」

探るような目で僕を見る美神美智恵。

でも、体はまだ動かないみたいだ。

確かに僕は人間ではないけど。

この世界じゃ、どうなんだろう？

「僕は亡霊の旅人（ゴーストリィトラベラー）。貴女が真理に辿り着いた時、僕の事がわかるよ」

「無茶苦茶じゃん。こんなのについていっていいのか迷うじゃん」

ハーピーを引き連れて、二人から離れようとしたけど、美神美智恵にちゃんと美神令子を教育するように伝えないと。

何の為に来たのかわからなくなる。

確かこの時期から亡くなった事にして、美神令子の前から消えたんだよね。

そして、寂しさから美神令子は守銭奴に変わってしまった。

「――美神美智恵。貴女がこの後何をしようとするか、僕は知っている。でも、それはおすすめしないよ。美神令子の精神に、多大な影響をもたらすからね」

「貴方、まさか私と同じ……」

一寸違う。僕は先に起こるイベントを知ってるけど、未来人でも時間跳躍者でもないよ。

でも、僕が実は異世界の住民だから……なんて、流石にそこまでは考えつくまい。

特に返答しないまま、ハーピーを引き連れてその場を後にした。

第零章、主人公紹介（前書き）

わかりにくい、技や武具の説明はその時に入れていきます。

第零章、主人公紹介

氏名、静馬篠宮

真名、シズマ＝ラインズ

マスター、創造神ブラフマー
（とある事情により神の戦士となり、人から竜種に転身した）
様々な世界を渡り、経験、スキルを体得している。

所有武器

吉備津天地刀
（タイプ、剣、所有者、桃太郎／シズマ＝ラインズ）

カリバーン
（タイプ、剣、所有者、アーサー／シズマ＝ラインズ）

ヒヒイロカネ
（タイプ、手甲、所有者、シズマ＝ラインズ）

無駄なしの銃
（フェイルノート）
〔投影魔術〕
（タイプ、銃、所有者、シズマ＝ラインズ）

天術、早風

（タイプ、剣、所有者、シズマ＝ラインズ）

所持スキル

格闘術
他武器を使った技術
召喚術
投影魔術
固有結界
空想具現化
天術

宝具

打ち砕くもの（ミョルニル）

天術、柔剛相交
（ワレモチウルチカラヲアワセマジワラン）

約束された勝利の剣
（吉備津天地刀）

勝利すべき黄金の剣
（カリバーン）

超電磁砲
（レールガン）

真・超電磁砲
（ハイ・レールガン）

固有結界
（ーーーー）

他、Ｆａｔｅに関する宝具。

王の財宝
（ゲートオブファンタズム）
〔投影した武器を展開する為〕

天の鎖
（エルキドゥ）

壊れた幻想
（ブロークンファンタズム）

赤原猟犬
（フルンディング）

第二章、山へ行こうよ（そのいち）（前書き）

話は全く進みません。

第二章、山へ行こうよ（そのいち）

「――告げる、
汝の身は我の下に、
我が命運は汝の剣に！
聖杯のよるべに従い、この意、この理に従うのなら――」

契約の文言。

元はＦａｔｅのサーヴァントの文言だけどね。

僕の力ある言葉は、対象である魔族ハーピーに働きかける。

「――我に従え！　ならばこの命運、汝が剣に預けよう……！」
「わかったじゃん、魔族ハーピー、その名に懸け誓いを受けるじゃん！
貴方を我が主として認めるじゃんよ、シズマ＝ラインズ」

誓いは交わされた。が、ハーピーの姿は変わらない。

「シズマ！　話が違うじゃんよ！　召喚獣になれば、あたいはハルピュイアに戻れるって言ってたじゃんよ！」
「ちゃんと話を思い出して。そんな言い方は全くしてないから。僕は召喚獣になれば戻してあげるよって言ったんだよ」

期待し過ぎたせいか、どうも召喚獣になった時点で風の精霊ハルピュイアに戻れると思っていたみたいだ。

怒るハーピーを適当にあしらいながら、僕等は神族の人界での中

継地点である妙神山に向かっていた。

「ずるいじゃん……あたいの純情な心をシズマは傷つけたじゃん……ずるいじゃん……あたいの純情な……」

急ぐ旅でもないので、人型を取らせて徒歩でゆっくりと妙神山に向かうが、繰り返し独り言のように僕への不平を洩らす。

流石に期待に応えないと可哀想かなぁ。

まあ出来なくは無いんだけど、場所が悪いんだよね。

人界は基本的に、双界に監視されている。

そんな場で軽々しく力を使う訳にはいかない。

世界から僕は注視されていないなら、尚の事目立つ訳にはいかないから。

最も、このハーピーも面白いから敢えて説明はしないけど。

「召喚士とはそう言うものだよ。もうハーピー、君は僕には逆らえないんだからね」

「ウキー！　なし！　なしじゃん！　あたいはもう魔界に帰るじゃん！！」

「そんな大声だしたらＧＳに退治されるよ、虚弱体質のハーピーちゃん？」

「ムキー！　仮面取ってもサディスト振りは変わってないじゃんよ

ぉおおおお」

僕はどこ吹く風で、ハーピーの叫びだけが辺りにこだました。

そして僕等は、とある結界で覆われた森の奥深くに来ていた。

そう、人狼達の隠れ里だ。

道のり的には妙神山の途中みたいなものだし。

「ここ、何があるじゃん？　あたいは妙神山には入れないけど、はっ、ここに捨てて行ってくれるじゃん？　魔界に帰れるじゃん？」

「希望的観測おつ。そんな訳無いでしょ。全く……君の為に来たのに、妙神山に直行するよ？　マジで」

訳がわからないだろうな。

僕が知ってる中で、神魔族に組みしていない勢力の中で最も強固な結界を築いているのは、この人狼族だ。

だから、ハーピーを元に戻すのに最も場所的に優れている。

問題があるとしたら、今ここにいるのが明らかに姿を隠した魔族と、それを率いている人外の存在と言う事なんだけど……。

山に入る時点で気配を絶っておけば良かったな。

まあ、一応呼び掛けてみるか。

「ハーピー、魔気を抑えろ。ここは人狼の隠れ里だよ。あまり、刺激しないように。誇り高き人狼よ、僕は召喚士、シズマ＝ラインズ。貴方方の助力を得たい。対話の場を設けてはくれないだろうか？」

語りかけている間に、ハーピーを促して買ってきたドッグフードの封を開けさせて、中まで匂いが届くようにする。

原作ではこれで、道は開けたけど状況が違うからな。

しかも、僕が一方的にお願いをするんだから無理矢理なんて出来ないしな。

「それにしてもシズマ。一体何をするつもりなんじゃん？」

「……時間かかりそうだな。ハーピー、君をハルピュイアに戻すのさ、この中で」

長期戦になりそうだと判断して、ビバークの準備をしながらハーピーに僕の考えを説明する。

「ちゃんとあたいの事考えてくれてたじゃんね……感激じゃん。シズマ、良い人間だったじゃんね」

大袈裟だな。一寸いじめすぎたか？

なんか調教されたみたいになってるし。

それにしても、魔族のハーピーの鼻を持ってしても、僕が竜人だという事はわからないか。

ハーピー。契約して、魔力や情報が流れ込んでるんだから、そこ

に魔力と神通力、神力がある事に気付こうよ……ある程度の記憶だって共有出来るんだから。

「冗談はともかく、ハーピー、君も僕の仲間だからね。当然、君が充実する為に尽力するさ」

「……惚れそうじゃん……ん？　でも、シズマはあたい等魔族も神族にも、見つからないようにしないといけないのかじゃん？　じゃあ、なんで妙神山に？」

おっ、生徒のハーピー君が鋭い所を突いたよ。

頭を撫でてあげよう。

「僕は普通の人間じゃないからね。注目される訳にはいかないのさ」

「訳ありマスターじゃんね。人間界も中々楽しい事になりそうじゃんね」

いやいや、僕は、極一部の例外だからね。

「開かないな」

「……じゃん」

村の結界の入口でビバークしているが、依然結界は解かれない。

時間はまだまだ余裕だけど、このままじゃつまらないな。

何か手早く、北風と太陽的な解決策はないかなぁ。

「どう思う、ハーピー？」

「あたいは馬鹿だからわからないじゃん。誰かに説得してもらえば

いいんじゃん？」

説得ねぇ……僕にはそんな友好的な知り合いいないしなぁ。

よしんばそれだけの力を持つ誰かに頼めても、世界を飛んだばかりの僕を信用してくれないしなぁ。

何処かにいないかなぁ、そんな、漫画みたいな、川沿いの土手で殴り合った後、親友になるような存在……。

「ー！？　それだ！」

「おわぁ！　ビックリしたじゃん！　やっぱりシズマは病院に行った方が……」

「いる！　いるよ、そんな存在！」

一人だけ思い浮かんだ。

頼るならあの人しかいない！

ナイスアイデアを出したハーピーを褒め称えながら、僕等は足早にその彼の所へ行く事にした。

第二章、山へ行こうよ（そのに）

「一体なんなんじゃん……」
「なる程……こういう風に、世界は収束するのか」

今、僕の目の前ではまさに死闘が繰り広げられていた。

相手は妖怪の医者と言われていた天狗と、主要人物の一人である犬塚シロの父親。

ならば今は、シロの発熱での膏薬を取りに来た所か。

でも、どうしようかな？

ここの結果、彼は片目の視力を失う。

それがなければ、犬飼ポチの妖刀八房の持ち出しも防げるかもしれないし、その命も救えるかもしれない。

でもなぁ、そうするとシロが街に出る事がなくなる。
つまり、横島がシロと会う事がなくなる。

「まぁ、彼ならそっちの方を望むだろう」
「何を独り言を言ってるじゃん？　やっぱり病院じゃんじゃん？」

毎回毎回失礼な奴だな。
ほっぺたつねってやれ。

「ひ、ひたひ、ひたひじゃんほぉ」

「口は災いの元だよ」
犬塚はやはり強いな、でも、天狗には及ばないみたいだな。
あ、刀が弾かれた。
これは決まったな。
シロが治ってるのを見ると、ただでは負けない筈……つまり、目をやられるのは、ここか！
「発動、ハーピー、フェザー・ブレッド！」
「ん？　わかったじゃん」
放たれるフェザー・ブレッド、その羽は僕の狙い通りに天狗の拳を制止した。
「いるのはわかっていたが……無粋な」
「ーー何者！」
「すまないけど、勝敗は決していた。ならば、無駄に負傷するいわれはないよ」
「私は、娘の為に、どうしても天狗殿の軟膏を手に入れねばならない！」
勿論、シロには治癒してもらわなければ困る。
だから、代替案として……。
「変わりに僕が貴方と戦います、天狗殿。勝った暁には、人狼の彼に、彼の望む薬を差し上げてくれないか？」

「……魔族を連れた人間よ。お前も私に望みがあったのではないのか？」

天狗にも僕が人間にしか見えないか。

いい感じだね。

でも、それに関しては犬塚がここにいた時点で、半分叶っているようなものだし。

「……しかし、何故貴方が私の為に」

「別に貴方じゃなければ駄目って事はないよね？　これが出来たら人狼の貴方に手を貸してほしい事なあるんだ」

ハーピーは意味がわからない。と言った顔。

ハーピー一寸馬鹿すぎないか？

脊髄反射で反応のするの止めようよ。

天狗は別に誰が相手でもいいという感じ。

犬塚は正直立ってるのも辛かったみたいで、座り込んでしまう。

「人狼殿、天狗殿、それで構いませんか？」

「私に出来る事なら、なんでも……宜しくお願いします」

「魔族を手駒にする人間を信用しろと？」

犬塚は娘の為に盲目的になってるみたいだけど、天狗はそうでもないみたいだな。

「そんなものは拳を交わしてみればわかるだろう？」

「……それもそうだな」
ハーピーには手出し無用と伝え、犬塚をヒーリングするように指示を出す。
「なんであたいが、人狼のヒーリングなんて……」
「なんか言ったかい？　僕の召喚獣の魔族ハーピーちゃん？」
「なんでもないじゃん！　ヒーリングなんてあたいは得意じゃないのに……そら、人狼、傷口を出すじゃん！」
「あ、ああ……済みません……」
「本当に使役しているのだな、人間が魔族を……」
「意外だった？　魔族（彼等）の方が力には従順だからね……」
言外に魔族よりも強い力を持っている事を伝える。
「いや、面白い。私の所に来て、先客の願いを叶える為に戦うなどと言う存在。しかも魔族を使役して、その魔族よりも強いと言う。楽しみだよ」
「それはどうも、じゃあ、始めようか？」
そこからは言葉はいらなかった。

さて、僕の戦術としては霊力の有無はわからないから使えない。
魔力に関しても、この世界に魔術という存在がないみたいだから無闇に使う事が出来ない。

僕の戦術は殆どが魔力を使うんだけどなぁ。

1対1を渇望する天狗に対して、僕の十八番の召喚術を使う訳にもいかない。

つまりは……本当に拳でのぶつかり合いしかないって事だ。

こういった試合形式のぶつかり合いに対して、天狗は超一流だ。

全く……心躍るとはこの事だね。

先制は天狗だった。

素早い移動からの突き出しや、縦横無尽に動き回り攪乱してくる。

僕も、受け流しを主体とした構えで一つ一つ確実に流して隙を窺う。

「動きに隙がない。彼は本当に人間かい？」

「あたいのマスターだからね。この位当然さね」

無闇に威張るなハーピー。

確かに天狗の攻撃は、フェザー・ブレッドより早くはないけど。

「避けるだけか？　お前もやはり口だけの人間か？」

僕の隙を狙っているみたいだが、そんな隙は見せない。

軽いジャブ程度の攻撃を繰り返しながらも、精神的な疲労から肩で息をしながらで僕を挑発してくる天狗。

「呼吸が乱れすぎだよ。そんな挑発ないでしょ？」

「……まだだ、まだ負けと決まってはいない！　秘術、影分身の術！」

まだ一撃もくらう前から追いつめられた天狗は、早速秘術を使う。

影分身か……便利だな。

その姿を二体とした天狗が、揃って襲いかかる。

左右からのラッシュを腕一本づつで防ぐ。

ドラゴンボールの世界か！

「ーーもらったぞ！」

背後から、第三の天狗が飛び込んでくる。

いやいや、わかってたから……。

「考えが甘いよ、天狗殿……」

左の天狗にはラッシュ時のラグをついて、拳を叩きつける。

分身だったみたいで、煙を上げて姿を消す。

右の天狗はそれを見て一瞬姿動揺する。

その間に、服を掴んで背後の天狗に投げつける。

「んな！？」

「天狗殿、敗因は、僕を人間風情と侮った事だよ」

空中で正面衝突した天狗二体に、必殺の一撃を叩き込む。

「必殺！　ライダーアァアアアァアァキッィィイイィイク」

格好つけた、ただの跳び蹴りが直撃した天狗は、木々を薙ぎ倒しながら地面に叩きつけられた。

「ーー成敗！　ハーピー、ヒーリングだ」

「つ、強い……」

「なんで、こんな事ばっかり……」

勝負はついた。

早速ハーピーにヒーリングさせる。

やりすぎたかな？

見ると、天狗は全くの意識不明状態で頭をお星様が飛んでいた。

「まさか私が人間に完膚無きまでにやられるとは……」

「油断するからだよ」
「そんなレベルのものではなかろうよ、全く……ほら、人狼よ、約束の軟膏だ」
投げ渡された薬を犬塚は大切に受け取る。
「よいのですか？」
「構わぬ、それがこの人間との約束だからな。強き人間よ、お前の名を教えてくれ」
「シズマ……静馬篠宮。召喚士だよ」
どうやら天狗に惚れられたか？
誇り高き妖怪が名を覚えると言う事は、それだけで意味がある。
「私も自らの未熟を痛感させられる、楽しい時間であった。何時でも来るといい。私はここにいる、歓迎しよう」
認められる、仲間として扱われると言う事は、家族として扱われるという事だから……。
「天狗殿、では、私は……」
「早く娘の所へ行ってやれ」
一刻も早くシロの所へ戻りたい犬塚は、そわそわととんでもなく落ち着きがない。
僕等との約束については、移動しながらと話している為、僕等も準備をする。
「あたい達も行くじゃんよ」

「そうだね。天狗殿、やっぱり一つお願いが……」
「なんだ？　やはり、私に願いが……」
「いや、違う。さっき見せてもらった影分身の術、使わせてもらってもいい？」

天狗は目を見開くと、これは愉快とばかりに笑い出した。

「我が秘術を、一度見ただけで我が物としたか。ほんに規格外よな。好きにするといい」

許可も得たし、色々な使い方も考えてみよう。

例えば、あれで武器でも増やして見たら面白そうだな。

僕等は呆気に取られたハーピーと犬塚と一緒に、人狼の里に歩を進めた。

第二章、山へ行こうよ（そのさん）（前書き）

プライベートで余暇がとれない状況にあり、暫くアクセス出来ないと思います。

なので、書きためていた分を全て投稿させてもらいます。

楽しんでくれていた方には、本当にごめんなさいです。

今後は期間未定でいつか更新になると思います。

第二章、山へ行こうよ（そのさん）

「なんで、私と同じ速さで走れるんですか！？　人間でしょう！？」
「あたいのマスターだからじゃん！」
「威張るな、虚弱体質……端から見ると、魔族に人狼が襲われているようにしか見えないだろうな」

我先にと急ぐ犬塚と、空を飛んでついて行くハーピーと、併走する僕。

驚くのも無理ないだろうけどさ。

「早駆」と言う、僕のスキルの一つ。

もっと高レベルで使えば、超加速も可能である。

因みに犬塚には、僕等の願いは既に伝えてある。

村に入る為の口添えをしてもらおうと、天狗の所に行った事も。

神族への転化に土地を使いたい。と言うだけならば、多分大丈夫だろう、との事。

神族が生まれると言う事は、その土地が神聖な力で包まれると言う事。

むこう何十年の豊作や微弱ではあるが、村の守護する力もあるのだから。

「では、行ってきます。まずは娘のもとへ行かせてもらうので、少し待っていてください」
「うん、わかってる。物事の優先順位位はわかってるよ」
「ああ……楽しみじゃん、これであたいもハルピュイアに戻って、姉様達に会えるじゃんよぉ」

村に入っていった犬塚。
夢想するハーピー。

長年の夢が叶うんだ。そりゃあ、うっとりもするよなぁ。

ハーピー短いつき合いだったけど、君との契約は楽しかったよ。

さて、まあそれはともかく……待ってる間暇なので、ハーピーを強化してみる事にした。

一日目
「意識が行き渡らないから、羽の同時操作が出来ないんだよ」
「む、難しいじゃんよ」

二日目
「フェザー・ブレッドを撃ち出して終わっちゃ駄目だよ。その後も操作を継続して、複数回対象を狙うようにしないと」
「あ、頭が痛いじゃん……」

三日目
「込める魔力が足りないよ。この位の威力じゃ、一撃必殺の宝具にはなりえないよ。もっと唯一の羽には魔力を込めないと」
「あたいにそんな魔力ないじゃんよ……」

四日目

グロッキーになったハーピーを、初日に作ったハンモックに寝せてのんびりしていた。

「そろそろかな？」

「うう……嫌じゃん。あたいの羽にやられるのは、羽、羽は嫌……」

やりすぎたかな？

僕やハーピーは睡眠が必要ないから、72時間ぶっ通しで鍛錬したのが、随分堪えてるみたいだ。

「静馬殿、お待たせしました……って、これは！？」

ん？　なんか変かな？

見回してみて、犬塚が驚いている理由がわかった。

えぐれた地面、なぎ倒された木々。

そう言えば、隠れ里なのを忘れてたよ。

一寸暴れすぎたな。

「ああ、ゴメンね、ハーピーの鍛錬をしてたんだけど、やりすぎちゃった」

「は、はあ、そうですか。あの、長老が静馬殿をお待ちです」

やっと会えるか。

グロッキーのままのハーピーを引きずって、僕等は人狼の里に足を踏み入れた。

「契約獣、ハーピー、古の盟約に従い、その姿を己の望むものへと転化せよ」

「ま、魔力が溢れて……ち、力、あたいは、あたいはーー」

光に包まれたハーピーが次に姿を表した時、その姿は威厳ある風の精霊、ハルピュイアであった。

「わ、私、戻れたんですね……」

涙を流してその場に座り込むハルピュイア。

見ると観客に来ていた人狼達も、貰い泣きしていた。

散々ハルピュイアが堕天した理由を話したからな。

「ハーピー、いや、ハルピュイア。君は神族に戻る事が出来た。この後、どうする？　君が望むなら、神界への道を開こう……いや、妖精郷か？」

ハルピュイアも元に戻ったし、もう必要もなくなった為、契約を解除しようとする。

「お待ち下さい、マスター」
「どうしたの？　君を戻す為に契約しただけだから、もう契約なんて気にしないでいいよ？」
「こんな大恩を受けて、何も返さずのうのうと天界に帰る事等出来ません」

義理堅いなぁ、原作のハーピーとはえらい違いだ。

いや、まぁ僕と共にいたハーピーならもしかしたらとは思ってたけどさ。

「そんな事は気にしないでいいさ。僕は僕の目的の為に君を捕らえたんだから」
「……魔人皇の事ですか？」

何故それを！？

いや、彼女はまだ僕の召喚獣。

僕の記憶を読んだか？
しかし、ハーピーは……。

「ハルピュイア、君はどこまで知った？」
「流石マスターです。すぐに気付かれましたか……小さな主の事位です」

……最悪だ。

殆ど全てじゃないか。

これじゃあ、ただ解放する訳にはいかなくなったな。

「契約の持つ重みは理解しているつもりです」

つまり、今の自分は、僕の持つ記憶をほぼ全て有していると考えるべきだな。

周りの見物客（人狼）達は、流れについていけずポカーンとしてる。

……まだ泣いてるやつもいるな。

全く……空気嫁。

「じゃあ悪いが、ならば契約を破棄する時に、記憶を消させてもらう」

「マスター、まだわかりませんか。鈍感や察しが悪いとか言われませんか？」

……あるな。

何故それを知っている？

「私は、マスターについて行く、と言っているんです」

「しかし……それでは、君が望んでいた虹の女神との再開も……」

僕の召喚獣になると言う事は、世界を捨てると言う事。

つまり、仲間との永遠の別離だ。

ハーピーみたいに、種族が変わったから会えない、みたいなレベルのものじゃない。

待人がいるならば、尚更そんな事するべきじゃない。

「恩だけてはなく、貴方という人に触れて、私が決めた事です。どうかマスター、私に貴方の使い魔となる許可を……」

そこまでしてなんで、僕を気にしてくれているのかわからないけど……まだ選択の機会はある。

長い目で見て判断してもらうか。

「……わかった。この物語の終着点までは、まだかなりある。ならば、その最後の時に、改めて君の答えを聞かせてくれ。それが僕の最上級の譲歩だ」

「頭の固い……わかりました。ではマスター、私は旋風の精霊ハルピュイア、改めて今後ともよろしくお願い致します」

仕方ないだろう。

僕の為に、全てを捨てろなんて言えないし、なんなら最後の時に無理矢理契約解除するって手もある。

今、僕にいる契約獣はカラスのクロウだけなんだから……言葉を話せる召喚獣には、かなりそそられるさ。

意識を戻すと、周囲から聞こえてくる溢れんばかりの拍手。

それは人狼達のものだった。

「おめでとう、精霊様」
「幸せにな」
「今の時代は女性上位だ」

口々に今の契約について言ってる筈だけど……何かちがくない？

「有難う御座います。私、幸せになります」

なんか、こう、もっと、チャペル的なあれを思い浮かぶんだけど……。

「いやぁ、ワシも随分長く生きたが、人と精霊様の婚姻等初めてじゃわい」
「私もです。シロにも見せてやりたかった」
いや、違うよ、あなた方、間違ってるからね。

「おい、里の牧師様を呼んでこようぜ」
「そりゃあ、いい。誰か、赤飯を準備しろ」
「あらあら、皆様、有難う御座います」

僕は必死に誤解を解いていこうとするが、まるで聞き耳を持たない。

長老に会うや否や、二つ返事で転身の許可を出した時から疑問に思うべきだった。

人狼達は……お馬鹿さんだ！

「投影……開始（トレースオン）」

誰も僕の言葉に耳を傾けないのをいい事に、僕は投影魔術を使って、刃を潰したダークを二本投影する。

「マ、マスター。お祝いして下さってるのですから、落ち着いてください……」

「うるさい……もういやだ。強引で、話を聞かない人外はもう沢山だぁ！」

筆頭として主の幼女が浮かんだが、その全てを怒りに変えて、僕は暴れ出した。

村の男達を全員叩きのめした事をここに述べておく。

「長老、今回は僕等に村の貴重な場所を使わせてめらい、有難う御座いました」

「いやいや、ワシ等にとってもよい話じゃったからの……それに、いいものもみれたし」

人狼を叩き伏せてから、すぐに村をでようとしたが、長老や犬塚に止められ一泊する事になった。

夕食は大広間で、熱が下がったばかりというシロと、父親の犬塚だけが不参加で、他の全ての人狼が参加するというお祭り具合だった。

人狼は祭り好きか。

超回復すごいな。

二〜三日は動けないつもりで、はたいたのに。

なんか、里に入る前は不審者だったのに、帰る時は家族みたいだった。

天狗もだけど、妖怪はやはり情に厚い。

今の僕には眩しすぎるな。

「静馬殿、本当に有難う御座いました。シロが助かったのは、貴方のお陰です。精霊様がいなければ、シロを嫁にでも、と思ったのですが……」

「あら、有難う御座います」

まだ言うか。

僅かに目を細めると、それだけで伝わったのか、長老にぶん殴られる犬塚。

すぐに起き上がって、信じられない位に手を振る犬塚。

全くもう……。

「静馬殿、貴方も、精霊様も、ワシ等にとっては最早家族同然。いつでも訪ねていらしてください。歓迎します」

「有難う御座います。嬉しいです。では、これで失礼します」

シロの顔を見れなかったのは残念だけど、家族が出来たのは嬉しかった。

隣に歩くハルピュイアを見ながら、次の行き先、妙神山に向かって歩を進ませた。

第二章、山へ行こうよ（そのよん）

崖を越え、谷を越え、僕等の山にやって来た。

はい、こんにちわ。世界を渡る旅人、シズマ＝ラインズです。
今は世界観に合わせて、静馬篠宮と名乗っています。

ここは妙神山にある神界と人界の中継点、妙神山修行場です。

「この門をくぐる者、汝一切の望みを捨てよ……ですか」
「やる気のない人は帰れ、って事か……ここまで来てそんな人いるのかね？」

門に張り付いたオブジェに見える鬼門の顔。
左右に控えるその胴体。

（何も言わなければ、鬼門は話さないつもりなのかな？）
（いえ、一寸だけ、ぷるぷるしています。話しかけるタイミングをみているのではないでしょうか？）

人見知りか……！

「入る手段がないねぇ」
「そうですね、門を叩けばいいのでしょうか？」
「汝等……」
「ハルピュイア、フェザー・ブレッドって、まだ使えるの？」
「はい、勿論です。マスターの鍛錬で行った事は問題なく行えます」
「一寸……」
「それは凄いなぁ、ハルピュイア、苦労してたんだね」

ハルピュイアの手には、光り輝く羽が。

ハーピーの頃とは、込められたエネルギーは比べ物にならない。

それだけ、堕天によって弱体化してたって事だろうな。

「じゃあ、ノックのかわりに一撃当ててみようか？　門が開くかもしれない」

「わかりました。では……」

「「待てーー！！」」

鬼門の胴体が、門と自分の顔を守るように立ちふさがる。

「「お主等はこの妙神山修行場に来た修行者だろう！　問答無用で攻撃するやつがあるか！」」

「やっと動いたか、空気読めない鬼だ事」

「テンプレ的ですね」

やっぱり顔が門にくっついてるから、フェザー・ブレッドは怖いよね。

「「我らはこの門を守る鬼、許可なき者、我らをくぐることまかりならん！　この右の鬼門！　そしてこの左の鬼門あるかぎり、お主等のような非常識な者には決してこの門開きはせん」」

「ハルピュイア、ゴー！」

「はい、フェザー・ブレッド！」

「「グオアアアアア」」

「やっぱり、門毎吹き飛んだねぇ」

「一寸強すぎたでしょうか？」

これでも、ハルピュイア的には大分加減したんだろう。

鬼門にも大きなダメージはないみたいだし。

「く、貴様等……がくっ！」

「右の！　しっかりしろ！　右の――！」

なんか、向こうではドラマが繰り広げられてるなぁ。

「じゃあ、入ろうか？」

「よいのでしょうか？」

いいさ、鬼門の試しは終わったし。

「お前達、一体何を……二人共、これは一体何事です！？」

建物から出て来たのは、竜神族の証拠である角をはやした一昔前の服装をしている管理人、小竜姫だ。

修行場に足を踏み入れた僕等は見えてないみたいで、神剣を手にして鬼門達に事情を確認している。

「あの者達が急に……」

「いきなり我ら鬼門を破壊しようと……」

鬼門、へりくだり過ぎじゃない？

（この世界、鬼と竜にそんな位の違いがあるの？）

（そうですね、見たままだと思ってもらえれば……）

鬼も苦労してるんだなぁ。

「貴方方、この妙神山修行場には、修行でいらっしゃったんですか？」

「はい、鬼門の試しと言うものがあると聞いたので……門を壊してしまったのは申し訳なく思っています」

「まあ、彼等にも非はあった訳ですし、今回は多めに見ましょう。でも、使役する神族を使うのはギリギリですね」

やっぱり駄目か……。

（まあ、そうでしょうね。私はマスターの召喚獣ですが、マスターの自力ではありませんからね）

（はあ、ま、見逃してくれたからいいんじゃない？）

とりあえずという事で、やっと修行場に入る事が出来た。

さあ、これからどうなるかな？

「申し遅れました。私はこの妙神山修行場の管理人をしています、小竜姫と申します」

「これはご丁寧に、私は召喚術士静馬篠宮。彼女は僕の契約召喚獣の……」

「旋風の精霊、ハルピュイアと申します。以後、お見知りおきを」

やはり知っていたのか、小竜姫の驚きは大きい。
「ハルピュイアって……魔族ハーピーですか！？　何故、いつ彼女が神族に転化したのですか！？」
またもや神剣を取り出してハルピュイアに向けようとする。
浅慮が過ぎるだろう、小竜姫。
全く……。
「転化していたとしても、今は神族ですよ。自らの同士とも言う存在に手をあげるのですか？」
「ーーうっ！」
僕の言葉を受けて、自ら手を止める小竜姫。
「それとも、一度でも堕天した存在は既に仲間ではないと？」
「いえ、そんな事は……」
真っ直ぐ過ぎる気質の小竜姫は、僕の言葉に少しでも思い当たる部分がある為、かなり歯切れの悪い返答を返す。
「彼女は僕の召喚獣です。侮辱するというならば、僕にも考えがあります」
「マスター、何をするつもりですか？」
「うーん、そうだな……上司に言いつけようか？」

「申し訳ありませんでした！　妙神山修行場を預かる立場なのに、軽はずみな行動をとってしまいました！　ハルピュイアさん。すみませんでした！　どうか、平に平にご容赦を！」

いやいや、ゲーム猿を恐れすぎだろうよ。

どうせ、このやり取りも見てるんだろうから無駄なのに……そう言えば、この娘も結構ドジっ娘だしね。

なんか、ここに留まる為の話や修行はもう一寸後になりそうだった。

「すみません、取り乱してしまって……」
「お気になさらず。マスター、話を進めますよ」
「ん？　ふぁああ。わかったよ、すぐ行く……」

余りに長い間、ハルピュイアへの謝罪が続く為、横長の椅子に寝ていたのだ。

「……私のせいなんでしょうが、よく人間が、神族の管理する土地で寝てられますね」
「気にしない、気にしない。そんな些細な事で悩むと……はげるよ」
「はげません！　全く……それで、貴方はどんな修行をお望みですか？」

ふむ、なんて言ったものか……とりあえず目的は達したし、１０

年間は暇なんだよね。
でも外界にいると、１０年間年老いない人間なんて奇異の目で見られる。
だから、修行はついでいいからここに置いて欲しい。
そんなの、どう伝えようか？
（いずれ、ある程度は話すのです。多少は、マスターの情報を開示する必要があると思います）
（やっぱりそれしかないか……彼女は真っ直ぐ過ぎるから、気をつけないとな）
とりあえず、１０年もいれば一回位はゲーム猿と会う機会はあるだろうし……普通の修行者を装いましょうかね。
神族の鍛錬にも興味あるし。
「自身の限界まで強くなりたいのです」
「何故そんなに力を求めるのです？　過ぎた力は己を滅ぼしますよ」
ハルピュイアは、僕と小竜姫のやりとりを黙って見ている。
きっと、僕の目標もわかっているだろうな。
「絶対に救わなくてはならない相手がいるのです。この存在を賭けても。これは僕にしか出来ないんです」
「……そうですか。わかりました。人界も色々あるみたいですね。本来ならば、紹介状を持っていない方の修行はご遠慮頂くのです

が今回だけ特別ですよ」

紹介状か……忘れてたな。

（今から唐巣神父の名前とか出してみる？）

（いえ、それでは逆に怪しまれます。むしろ彼女の好意に甘える方がよいでしょう）

「それで、篠宮さん。貴方はここでどのような修行を望みますか？」

それだ！　その質問を待っていた！

今だ、トラップカード発動！

「とにかくきついやつを。判断は小竜姫様にお任せします。期間は大体１０年以内でお願いします」

「私も転化して時間が経っていない為、出来るだけ長い時間あった方がマスターの助けになれる為、助かります」

「また、難しい事を言われますね。それでは修行者と言うより、私の弟子ではないですか」

なるほど、それも悪くないな。

魔人皇となった横島に最後まで助力した神族は、彼女と天龍を中心とした竜神族だったしね。

今の内に引き入れておくか。

「神剣の使い手と音に聞こえた、小竜姫様の弟子ですか。素晴らしいですね。宜しければ僕を小竜姫様の弟子にしてはもらえませんか

？」
「えっ？　私、私に弟子ですか……愛弟子、可愛い、やりがいのある……でも、私は妙神山修行場の管理人と言う立場が……」

迷ってるな。

確か彼女に直の弟子はいない筈。
修行者は妙神山に来たのであって、今まで小竜姫に修行を請いに来た人間はいない筈。

「……と思って言って見たんだけどさ」
「はあ、私も多少は効果があるかと思って話に乗ってみたのですが……」

まさか、ねぇ……。

「「こうもトリップ（される）するとは……」」

結果としては、彼女の弟子になる事は出来た。
しかし、それは今、この時間から実に一時間以上も小竜姫が妄想に耽った後の話であった。

第二章、山へ行こうよ（そのご）

「じゃあ、まずはこの服に着替えてくださいね」

日本の銭湯みたいな作りの建物に入る際に渡された服に着替え、僕はその先の異空間の広がる土地に出る。

因みに着替えはハルピュイアは別である。

僕は別に構わなかったが、ハルピュイアと小竜姫様が反対したのだ。

なんか、二人に言われると肯定した僕が、飛んだ変態野郎みたいで嫌だな。

一応弟子入りしたので、様付けで呼ぶ事にした。

小竜姫様は、普通に名字呼びである。ぶっちゃけた所、偽名なので名字読みの方が違和感があるけど。

（マスター、この空間……）

（うん、一寸失敗したかもね）

目の前には、天下一武闘会よろしく、戦闘場と人一人入れる程度の魔法陣が設置されている。

（やっぱりこれって……あれだよなぁ）

美神令子が受けたデットオアアライブの修行だよね。

（ですね。しかも、マスターのシャドウは恐らく……）

（……確実にドラゴンだよなぁ）

一応、今までの異世界の旅で竜種に転化してるからなぁ。

（今バレるのは不味いよね？）

（それはもう……マスターは既にこの世界の竜神、小竜姫さんに弟子入りしていますから。最悪、行かず後家と言われる竜神に拘束され、この場でゲーム猿の名の下に祝言があげられ、幸せな、しかし確実に何かを失ってしまう選択肢と共に、人界に帰れなくなる羽目に陥るでしょう）

なんか、随分具体的だな。

（ハルピュイアってさ……小竜姫様の事、嫌い？）

（いえ、そんな事ないですよ。良くも悪くも神族ですしね）

ううむ？　ハルピュイアは神族じゃないのかな？

（私をその括りから解き放ったのは、どなたですか？）

（……すみません、僕です）

じゃあ、仕方ない。適当に誤魔化すか。

「じゃあ、篠宮さん。この方……「一寸待ってもらえますか？」……どうされました？」

不思議そうに首を傾げる小竜姫様。人を疑う事のない無邪気な表情だね。

「何をするかはわかりませんが、長期間の修行の予定です。よけれ

ば、まずは僕の力を知ってもらいたいのですが？」「それも一理ありますね。いいでしょう。じゃあ、特別に私が相手をします」

腰の神剣に手をかける小竜姫様。

（ちゃんと加減してくれるよね？　彼女？）

（……余裕もって回れれば、多分）

（それは無理って事？）

（マスターが加減はしないって事でしょう？）

（魔術、召喚術、天術、超能力全て使わないんだよ。技術位は真剣にやるさ）

やはり、スラリと神剣を抜き放つ小竜姫様。

「篠宮さんは獲物は何にしますか？　特別にそちらにある物は、何を使用されても構いませんよ」

見ると、そこには様々な武器防具が出現していた。

（中々の物ですねぇ）

（うん、結構ランクの高い武器ばっかりだ）

（流石愛弟子ですね）

そう言われるのも、なんか罪悪感が……。

いつか真実を話します。

そう心の中で謝罪して、とりあえずその中にあった真鍮の手甲と苦無を手にする。

「では、これ等をお借りします」
「……わかりました。いつでも構いませんよ。かかってきなさい」
さて、ブラフマー様の言葉が真実なら、この状態でも良い勝負が出来る筈。
ぶっちゃけ、これで勝ってしまったらもう仕方ない。
そう言う運命だったんだろう。
じゃあ、始めようか。
幾つかの苦無を忍ばせ、手甲を装着して小竜姫様と相対した。

さて、お兄さんは瀕死です。
小竜姫様との手合わせ、初めは順調だった。
太刀筋の分かり易い小竜姫様の剣は、確かに速さはあるけど対処出来ない程じゃない。
回避、受け流しをしながらカウンターを狙う僕の戦術は効果的だった。
まあ、近接戦闘のスペシャリストじゃない美神令子が凌げた位だ。

僕に出来ない筈がない。

問題はその後だった。

どうも劣勢を悟った小竜姫様が、即座に使ってきたのだ。

超加速を。

「――ぐはっ！」

「どうしました？　まだ、私に致命打は与えられてませんよ？」

背部に走る衝撃に耐えながら、体を起こす。

「一寸反則じゃないかな、これは？」

（やはり、こうなりましたね。マスター、如何なさいますか？）

姿を消すと同時に、襲う攻撃を直感のみで防御しながら攻撃の隙を探す。

（やられっぱなしもしゃくだね。せめて一矢報いたいけど……）

（マスターは一応召喚士なんですよ……と、もう聞いてませんね……）

韋駄天じゃない小竜姫様は、長時間の超加速は使えない筈。

その動きは無限じゃないし、必ず何処かで止まる。

そこを突くしかないな。

でも、そんな事は本人も理解してるだろうから……手は……。

「人間としては大したものですが、私の弟子になるにはまだまだこれから修行が必要ですね。じゃあ、今日はこれでお終いです！！」
入った！

「発動、苦無、影分身の術！」

僕は苦無を空に放ると、その数を増加させる。

僕の体を包める位の数を。

「なっ！？　これは！！」
「そこですね！！　拳技、短勁！」

僅かな抵抗と共に消えていく苦無。

それにぶつかり鋭さの鈍った神剣を右腕で受ける。

綺麗に切断された右腕に構わず、気功を込めた正拳突きを小竜姫様に叩きつけた。

「きゃあああああ」
「まだ！　発動、苦無影分身！　行け！」

消失して残ったオリジナルの苦無を、再度複数に増加させて小竜姫様に投擲した。

「ふう、止血しないとな……」
「マスター、私から一つ、貴方に言いたい事があるのですが……」

落ちた右腕をつけて、僕にヒーリングするハルピュイア。

心なしか頭に角が見える。

「聞きません」

「子供ですか！？」

「聞きません」

「このマスターは……とにかく、無茶な真似は止めてくださいね。無駄にハラハラさせないでください」

「……悪かったね。つい熱くなっちゃって」

「わかってますよ。そう言う人なのは……マスターの歴史を知ってるんですから。これはただの愚痴です」

耳が痛いなぁ。気をつけないと。

「うう……まさか私が負けるとは」

「小竜姫様、有り難う御座いました。お陰で自分の危うさと、未熟さを悟る事が出来ました。これからよろしくお願いします」

きょとんとする小竜姫様。

そりゃあそうだよね。

人間に負けたと思ったら、礼を言われてるんだから。

「私個人としては、もう少し手を抜いてくださると良かったのですが。まあ、武神ですものね。あまり手を抜かれると矜持にかかわりますしね。

マスターが不足を自覚出来たのです。これも試練にしてくださっていたのでしょう？　有り難う御座います」

ハルピュイアもすぐに、僕に便乗してくる。

「え、ええ……時間はまだまだ沢山あります。今日はこの辺にしておきましょう。ヒーリング……はハルピィアさんがいるから大丈夫そうですね。じゃあ、脱衣場の裏に温泉がありますから、そこで疲れを癒やして下さい。私はこの後の準備もあるので、先に戻りますね」

言うや否や、小竜姫様は先に戻ってしまった。

「悪い事したなぁ」

「流石に純粋な神族の小竜姫が相手だと、罪悪感がありますね」

ハルピュイアと顔を見合わせる。

「どうする？」

「マスターにお任せしますよ」

つまり、思いは一緒か。

なんか、ついてそうそうこんなイレギュラーな事ばっかりでいいのかなぁ？

長い付き合いになるんだし、フォローしとかないとな。

ハルピュイアの事を見ながら、人知れず溜め息をついた。

第三章、世界は僕に牙をむく（そのいち）

今日、信じられない事が起きた。
それは朝まで振り返る。

「動きが甘いですよ！　はぁ！」
「だぁぁ！　人外の動きなんて真似できるか！　拳技、短勁！」

それ、剣二本を同時に振ってるんじゃないの？　って位にほぼ同時に見える神速の剣戟を、拳に込めた気を爆発させる事で距離をとって回避する。

「その神族の剣を！　一太刀も浴びずに！　いなし続けるのは！　何処の人外認定ですか！」
「いや！　だって！　当たったら死んじゃうし！　だぁ！　だから無理だって！　物理的に篭手と神剣の鍔迫り合いとか有り得ないから！　脚技、スピンアタック！」

肩で息をしながら距離を取り、そろそろなんとかしないと命がダイイングだな、と悟り体内の気を高める。

「む、やる気になりましたね。ですが私も毎回毎回毎回毎回毎回毎回毎回毎回やられてばかりじゃありませんよ！　目にもの見せてあげます！」
「小竜姫、日本語が不自由な人になってますよ。それに、前口上は結構ですが、まだマスターに一太刀も入れた事ありませんよね？」

僕の前で構える小竜姫様の神剣が、脱力したようにその切っ先を

落とす。

「ハルピュイアさん。それは言わないで下さい。武神としての誇りを取り戻す為、私はなんとしても篠宮さんを越えなくてはならないのです」

熱くなってるなぁ。

僕としては程々にしてほしいんだけど……。

「さぁ、行きますよ！　はぁぁぁぁぁ！」

「えっ！？　ちょっ！？　移り変わり早！　仕方ない、トラップカード発動！」

小竜姫様のテンションに突いていけなかった僕は、なんの工夫もなく突撃してくる小竜姫様に対して、事前に準備していたトラップカードを発動させるしかなかった。

「ひゃっ！　キャアアアアアア！」

「……落とし穴、ですか」

「いや、本当は鬼門でも埋めてみようかと思ったんだけど……」

ハルピュイアと穴を覗き込む。

見えないなぁ。鬼門用だから深く掘りすぎたな。

「コホン！　まあ、とりあえず、マスターの勝ちぃ」

「待って下さい！　異議あり！　です！」

「おわぁ！　お化け！」

「誰がお化けですか！」

穴から飛び出してきた小竜姫様は、不満ありありな様子だった。

「……面倒くさい。埋めればよかったか？」

「マスター、声に出てますよ」

小竜姫様はこれでなかなか負けず嫌いだ。

だから、試合で勝った後のこの説得にも骨が折れる。

「何が不満なんですか？」

「何って、こんな、落とし穴なんて卑怯です！」

「ふむ、じゃあ、小竜姫様は魔族や害悪となる敵が、正々堂々と正面から向かってくるとお思いですか？」

「いや、それは……」

「そうでしょう。小竜姫様はそのような卑怯な手段への免疫が無さ過ぎます。

格下ならば、その類い希なる剣技で相手を成敗出来るでしょう。

しかし、今みたいな技術が均衡、もしくは劣勢の場合は？　容易く不意を突かれるでしょうね」

「……」

「僕の勝ちです。いいですね」

「……はい。私、一寸休みますね」

とぼとぼと自室に歩いていく小竜姫様。

お昼を奮発しよう。そう思いながら、最早日常となった朝稽古を終える僕等だった。

初日に小竜姫様をのしてから、毎朝小竜姫様の手合わせにつきあわされている。

余程悔しかったんだろう。

常に神剣装備で、闘気全開で切りかかってくる為つい毎回打ち倒してしまう。

その後、落ち込んで昼まで姿を見せない小竜姫様を、食べ物の匂いで誘い出すのだ。

「まるで天の岩戸ですね」

「……まあね」

と、言う訳で今は昼食の仕込み中。

「次はどうやって断りましょうか？」

「そうだねぇ。腹痛、頭痛に体調不良と思いつく事は全部やったしなぁ」

これは小竜姫様が毎回誘ってくる、シャドウを出す方円の修行の事だ。

これを受けると、僕が竜種である事がバレてしまうからどうしてもやる訳にはいかないのだ。

「何かイベントでも起こりませんかねぇ」

「いいねぇ、妙神山全体が巻き込まれるようなのがいいねぇ」

ん？　これって何かのフラグ？

「ーー大変だぁ！」
「小竜姫様！！」

「うわぁ、鬼門の二人が障子を破壊しながら、小竜姫様を探してキッチンに飛び込んで来たぁ」
「マスター、説明口調にも程があります」

目が泳ぎながら、ドタバタとキッチンを駆け回る鬼門達をウルサいので黙らせる。

「「……静馬よ、痛いではないか」」
「誇りが立つ。小竜姫様はお部屋にこもってるよ。騒ぐならそっちに行ってくれ」
「いや、静馬でも構わん。来てくれ、緊急事態なのだ！」

僕の腕を左右から掴む鬼門達。

「一寸、何この宇宙人連行のポーズ」
「では、私は小竜姫さんを呼んできますね」
「ハルピュイア殿、頼みます」

それにしても鬼門がここまで慌てるなんて、何があったんだろうか。

道場破り？　魔族でもきた？

そして、鬼門（顔）に移動した前にいたのは、籠に入れられた赤ん坊の姿だった。

「静馬、我等はどうすればいい？」
「動転しすぎ。まずは小竜姫様の指示を仰ぐべきだろうね。まあ、ハルピュイアが小竜姫様を呼びに行ってるからそれまで……って、話は最後まで聞こうよ」

鬼門は僕の言葉を最後まで聞かずに二人揃っていなくなる。

困ったからって……門番しろよ。

「でも、鬼門が全く気付かなかった所を見ると、何処かから転移して来たんじゃないかと思うけど……」

眠り続ける赤子を見る。
抱き上げてみる。

泣き声一つあげずに眠り続ける。

「この子、この後はここ（妙神山）で暮らす事になるのかな？　いや、ヒャクメに時空間の測定をさせるか？」

原作内の妙神山修行場にその子はいなかった……映らなかったけど。

それにしても可愛いなぁ。

ドスンドスンと足音が近づいてくる。

鬼門とハルピュイアが小竜姫様を連れてきたか。
「かごの中に……ん？　底に何かあるな」
両手で赤子を抱き上げている為、手に取る事が出来ない。
僕の直感が騒ぐ。僕は必ずあれを手にしないといけない気がする。
「マスター、その子が鬼門さんが騒いでいた子供ですか？」
「静馬！　不用意に触ると爆発するかもしれんぞ！」
「しないよ……馬鹿か？　ハルピュイア、丁度いい所に来た。この子一寸抱いててくれる？」
僕はハルピュイアに抱いていた赤子を手渡す。
「あら、可愛い！　私にも抱かせて下さい」
「小竜姫様、その赤子……爆発しますよ」
ハルピュイアに手渡した赤子に、遅れてきた小竜姫様も虜になる。
「静馬よ、何をしているのだ？」
「ん。一寸気になる事があってね」
鬼門（どっちの鬼門かはわからないけど）が、ゆりかごに手を出す僕に声をかける。
そして僕が手にしたのは、赤く汚れた布だった。

「布？　随分汚れてるけど……」
「まるでバンダナですね」

バンダナ？　赤い……妙神山に現れた赤子……？

「男の子ですね。本当に可愛いですね。捨て子ならここ（妙神山）で育てましょうか？」
「小竜姫さんよくわかりますね。私には性別なんてわかりませんでした」

男？　バンダナをつけた……この世界で僕に干渉しうる……まさか！　横島忠夫か！

「マスター！　体が！」
「ー！　篠宮さん！！」

「なんだ！？　これは……体が、消える！？」

手にしたバンダナを中心に、原子分解を起こしたかのように粒子になる僕の体。

これは止める術が思いつかない。加速度的に進む崩壊に抑える手段は思いつかない。

きっかけはこの子、恐らくは横島忠夫のバンダナなんだろうが……でも、なんでこの時代に赤子の横島忠夫がいるんだ？

１０年前の世界に来た筈だから、横島忠夫は６～７歳の筈。
歴史が変わった？

何故？　いや、歴史は正常に流れている。
なら原因は僕だ。
何処が悪かった？　ハーピーを召喚獣とした事か？　シロと横島忠夫の接点を断った事か？　小竜姫様をへこませた事か？
わからない。考えれば考える程に全てが悪かったような気がしてくる。
わかるのは最早手のうちようが無い事だけ。
「くっ！！　ハルピュイア、後は任せた！」
そして僕はこの世界から消えた。

第三章、世界は僕に牙をむく（そのに）

その場所は妙神山。

そこには僕、静馬篠宮、それに僕の召喚獣、つむじ風の精霊ハルピュイア。妙神山修行場の管理人、竜神小竜姫、その門番鬼門。

そしてその場所には、先日妙神山修行場の門に捨てられた一人の赤子がいた。

「マスター、忠夫さんが泣いてます！」
「お腹空いたのか！　トイレか！　お風呂か！　わからーん！」
「わ、私はお乳は出ませんよ！　や、止めてください……ふわぁ……篠宮さん、助けてくださーい。ふえーん」
「神族が赤子の世話で泣くな！　鬼門！　忠夫ちゃんが泣くから部屋に来るなって言っただろう！　え？　修行者？　追い返せ！　小竜姫様がこんな状態で修行なんて出来るか！」
「しかし、小竜姫様の修行を希望する人間達だぞ」
「だからよく見ろ！　こんな小竜姫様を人前にだせるか！」
「ふえーん、止めてくださーい」
「……わかった。右の、行こう」
「……ああ……お痛ましや」

号泣の小竜姫様、基本僕に丸投げのハルピュイア、いるだけで泣かれる鬼門、姿を表さない猿。

そして、育児の経験もないのに、人間だからと言う理由で統括させられる僕。

小竜姫様に抱きつきながら泣きわめいている赤子、横島忠夫を見ながら、平穏を感じながらもため息が止まらなかった。

これは僕があの後に起こると思った理想の世界。

しかし、僕は消え、既に起こり得ないものとなっている。

「これは虚像だ……貴方は僕に何を見せようとしてる？」

僅かに感じる何者かの気配に対して問いかける。

場面は暗転する。

崩壊した妙神山。

傷だらけで倒れた小竜姫様を抱き上げる僕。

「小竜姫様！　しっかりして下さい！　小竜姫様！」

「し、篠宮さん……皆さんは……」

自らの体ではなく、奥の異空間に避難した仲間達の安否を気にする小竜姫様。

「皆、無事です。小竜姫様が時間を稼いでくれたお陰です」
「そうですか……それは良かったです。篠宮さんが来たんです。後は貴方に任せさせてもらってもいいですか？」
力無く笑いながら、私も力になれた。と呟く小竜姫様。
様々な妨害にあい、妙神山に来るのが遅れた事を後悔しながらただ是、と答える。
「じゃあ、安心ですね。私は少しだけ眠りますね……あ……とは……お願……い、します……」
掴んだ手から力が抜ける。そして、小竜姫様は静かに目を閉じる。
「待っていて下さいね。僕は貴女と同じ場所には行けないけれど、貴女に仇なす全ての愚者は僕が深い闇の底に叩き落としてみせますから」
静かに小竜姫様を寝かせると、僕は吉備津刀とカリバーンを手にすると魔族の大群に突撃した。

なんだ、これは……。
更に舞台は暗転する。
蠅の王、ベルゼブブ。

その大量の群体に僕はかかりきりで、フェンリルとなった犬飼を止める事は出来ない。

「皆、逃げるんだ！　儀式も失敗した君達に扱える相手じゃない！」
「俺達が逃げて、そしたら町の人達はどうなる？」
「……死ぬでしょうね」

僕の言葉を受けて、口に出した横島の言葉に美神令子が答える。

「こええけど、そんな状況で引ける訳ないだろう！」
「格好良すぎる！　何か変な物でも食べたのでは？」
「しかし、横島の言う通りじゃ！　今以上に理想的な人員を集めるのは不可能、やるしかないじゃろう！」

横島の言葉に驚くおキヌちゃんに、同意するカオス。

「……しかし！！」
「静馬君……私達にだって一流のプライドがある。横島君の言う通りにするのは癪だけど、ここは私達がやらなくちゃいけないでしょう」

気合いを入れる美神令子。

一致団結してフェンリルに挑む横島達一行。

結果は……駄目だった。

可能な限り早くベルゼブブを殲滅した僕が見た物は、魂までも引き裂かれて息のない仲間達の姿だった。

場面はいくつも変わる。

成功してしまったおキヌちゃんの横島殺害。

アシュタロスに力及ばす敗れる神・人の混成部隊。

ＧＳ試験の際に資格も取れずに敗北し、ＧＳになる事なくアシュタロス戦役に突入する横島忠夫。

どの未来も、決して横島忠夫は救われない。

ほんの少し、歴史の枝葉が変わっただけで、その未来は絶望に彩られたものとなる。

そして、その変わった未来は……。

「僕がその場にいた……それがこの結果か」

「そうだ。お前が干渉した未来は、その全てが今見たような世界を破壊する要因となる」

先程から感じていた気配が濃厚になる。

「……魔人皇ヨコシマ、ですね」

「そうだ。俺は横島であり横島ではない。全ての存在の先にあるもの」

御大自らお出ましとは……本格的に僕をこの世界から消すつもりか。

「それで、害悪となる存在である僕を貴方はどうするつもりか？」
「そこに言葉が必要か？　俺は横島忠夫と言う存在が、俺へと至らないようにする為、その要因を全て排除するだけだ」

闇が形を取り始める。
そして、額には赤いバンダナをつけた黒い外套につつまれた青年の姿があった。

僕では相手にならないだろう。
それに、これだけの結果を見せられては、自らの存在意義すら疑問に思ってしまう。

「俺が見た未来は全て絶望に彩られていたが、これからは違うかもしれん。
ひょっとしたら、たった一つの真理に辿りつけるかもしれん。
この絶妙なバランスで成り立っている、終わりかけた世界で力を示せば、お前と言う存在が世界に認められるかもしれん。
全ては俺の主観からお前を消そうとしているだけだ。
異界からの戦士よ。剣を取れ。ただ死ねとは言わん。最後まで抵抗してみせろ」

ヨコシマの言葉は全てその通りだ。
しかし、見た感じ世界に、神々に愛されたヨコシマという存在がいるの以上、僕と言う存在は必要無いんじゃないかと思う。

「でも、まあ、ここで終わるのは、神の戦士として一寸癪だよね。

この空間って、召喚術は使えるのかな？」
「勿論だ。ここは俺が作り出した無の空間だ。俺もお前も、１００％力を振るえる」
それは好都合。どうやら彼は、本当に僕に力を示させようとしているみたいだ。
契約の楔は、時空間の流れで切れたりしない。
ハルピュイアとカラスの召喚獣、クロウ。狼の召喚獣、ミリアを召喚する。
「マスター！　一体何が！？　と、これは……？」
喚ばれてすぐ、僕に突っかかってきたハルピュイアも、すぐに周囲の状況を確認し始める。
「召喚獣、行使、同期」
全ての召喚獣に僕の記憶を流す。
「これは……やるしかないでしょう。ねえ、先輩方？」
クロウとミリアに同意を求めるハルピュイア。
言葉にはせずに同意を示す二匹。
クロウとミリアは生前行使していた召喚獣。
創造神ブラフマー様との契約の際に、世界と一緒に切り離されてしまった。

だから、今、僕が呼び出せるのは、彼等の影のようなものだ。
その事が時々寂しいと思う事があるけど、自分が選んだ事。
後悔はしない。
「まあ、勝てないだろうけど、せめて一矢報いようと思ってね」
「わかりました。マスター、指示を……」
Ｆａｔｅのアーチャーの着用していたマント、赤原外套を投影する。
「作戦は一つ。全力全開！　全ての力を解放する！　持てる力を全て駆使して眼前の敵を殲滅せよ！」
僕もその手に愛刀、吉備津刀、カリバーンを呼び出す。
「準備出来たか？　最高神の認めるその力、見せてもらおうか？」
「後悔するよ？　僕は亡霊の旅人、神の戦士……さあ行くよ、世界に愛された人を越えて、神を越えし者よ。文殊のストックは充分か？」
僕は手にした吉備津刀を、魔人皇ヨコシマに向けた。
「ミリア、行使、早駈！　クロウ、行使、雷撃！」
召喚獣に指示を出して、僕は幻想で出来た王の財宝を解放する。

「発動、王の財宝（ゲートオブファンタズム）！」

僕の宝庫には、突き刺されたランクの高い武器がない。

ダークが主だった獲物だ。だけどそれでも、中級神魔に傷を与える事が出来る位の神聖はある。

多少の足止め位は出来るだろう。

「行きますよ……フェザーブレッド！」

僕のダークに紛れて、ハルピュイアのフェザーブレッドが的確にヨコシマに迫る。

「ふむ。様子見にしてもランクが低すぎるな。期待していたのだが……この程度か」

クロウの雷撃やダーク、フェザーブレッドを受けても顔色一つ変えない。

ヨコシマが一払いするだけで、それは衝撃波になり彼に迫る全ての事象はかき消された。

「なんて事……微々たるダメージすら、受けていないと言うのでしょうか？」

「いや、ダメージは通っているだろうね。ただ、低すぎるんだろう」

蚊に刺されても、刺されてすぐは人にはわからない。そんな感じか？

でも、蚊だって後から痒みを感じさせたりする。

微々たる物であっても、無駄じゃない！

「クロウ、行使。電磁砲！　ミリア、行使。無駄なしの銃（フェイルノート）！」

クロウはエネルギーを溜め、口唇から圧縮された電流を放つ。

ミリアはその姿を変え、一丁の短銃となる。刀を消し、僕の手に宿る。

「発動、装填、真・超電磁砲（ハイレールガン）」

風と稲妻の宿った弾丸。絶え間なくダークを降らせながら狙いを付ける。

「ほう……召喚獣を宝具とするか。なかなか面白いな。宝具級の威力を持つ召喚獣も大したものだが、この馬鹿の一つ覚えのような剣だけは無駄だな」

「そうでもないよ。ダークだって無駄じゃない……発動、壊れた破壊（ブロークンファンタズム）！」

降り注ぐ全てのダークが、質量を持って爆発を起こす。

そして、その隙を逃さず、僕は無駄なしの銃の引き金を引く。

「発動、無駄なしの銃（フェイルノート）」

超電磁砲に渦巻く風の力をブレンドして、数倍の威力を持つ真・超電磁砲。

確かに直撃を確認した。
「追随します。フェザーブレッド！」
ハルピュイアが先程とは違い、複数のフェザーブレッドを放つ。
様々な方向へ放たれたフェザーブレッドは、空中で方向を変えると全てがヨコシマに直撃する。
「ーーどうですか！？」
「……駄目か」
真・超電磁砲から巻き起こったエネルギーの余波が消えると、全くその場から動いていないヨコシマの姿がそこにあった。
「大したものだよ、全く。これだけの力があるならば、人界で力を抑えられたアシュタロスならば、倒せるかもしれないな」
「その遙か上に自らがいる……と」
「無論。俺は全ての存在の頂点に立つものだ」
ヨコシマが、その手をこちらに向ける。
「くっ！？　全員、全力で回避！」
皆に指示を出し、僕は全力で横っ飛び。
目視出来ない速度で、何かが今まで自分のいた場所を襲った。
「ハルピュイア、見えたか？」

「魔力弾なのはわかりましたが……早すぎます」
「どうした？　この程度も対処出来ないのか？」
次々放たれる魔力弾。
直感と、向けられた手の位置だけで回避する為、とても反撃にうつる暇がない。
「クロウ！　くっ！　駄目か……はっ！　避けきれない……発動、竜炉心（ドラゴンハート）、竜の羽ばたき（ドラゴンウイング）！」
撃ち抜かれて消失したクロウに気にとられ、回避が遅れた僕は竜の因子である竜炉心から、風の守りを発動させる。
「ぐぁ！　貫通だって……そんな、僕の竜の羽ばたきが」
張られた風の守り等全くないかのように、ヨコシマの魔力弾はその守りを突き破り、僕の右腕を吹き飛ばした。
「マスター！？」
「大丈夫！　あの魔力弾を止めなきゃ……発動、約束された勝利の剣（吉備津天地刀）！！」
痛みに耐えながら、左手のみで吉備津刀の真名を解放する。
ヨコシマに光が降り注ぎ、一時的にその魔力弾の連射が止まる。
「傷の手当てを……」
「ハルピュイア、落ち着いて。そんな時間はないよ。それよりも、手を貸して。あれをやるよ」

それだけで、ハルピュイアにもわかっただろう。
「しかし、それではマスターが……」
何か言い掛けたみたいだが、言葉を収める。

「わかりました。マスター、次の指示を」
「召喚、クロウ、ミリア。二人共、少しの間時間を稼いでくれ」
召喚獣は死なない。やられても、エネルギー体なのでマスターの中に戻るだけだ。

そして、魔力さえあれば何度でも再召喚可能なのだ。
「ハルピュイアは、僕と一緒に宝具発動に力を貸してもらう」
「わかりました。我が儘なマスターを持つと、私達も大変です」
ハルピュイアの嫌みに、苦笑しながら再度ヨコシマと相対する。
「神の戦士よ、もういいのか？」
「ああ、今から僕に出来る限りの最奥を見せてあげるよ」
「今までも、充分上級神魔を滅せるだけの力はある。楽しみだ」
幾度やられても、何度となく召喚され猛攻をしかけるクロウとミリア。
それを見ながら、僕は世界に働きかける言葉を紡ぐ。

「我は創造せん、共に有る世界を」

ヨコシマは、やはり余裕があるようで、僕の言葉を楽しそうに聞いている。

「繋がらん、夢想せし心象の奇跡を」

今までが全く通用しなかったのだ。これでもやはり不安はある。

「失われし数ある絶望、力無き忘却の記憶よ」

しかし、最早僕には他に打つ手はない。

「我と我等全ての根源となる無限へ。
悲しみと慈しみの共存する慈愛の歌」

ヨコシマ……横島忠夫の最後。
それは最早変える事の出来ない終着点なんだろうか？

「今救おう、我等と汝等の有らぬ悲しみを」

何かが足りない……彼等を救うには、ただ蛍の魔族ルシオラを救ったり、アシュタロス等から世界を救うだけでは駄目なんだ。

僕は間違えてしまった。
彼の周囲の環境を変える。それじゃあ駄目なんだ。

それがわかったからこそ、僕は今簡単に引く事は出来ない。だから……。

「世界は、僕と、僕等全てが等しく有る為に……力無き弱者の歌！！」

瞬間、世界は姿を変える。

それは、僕の中にある失われた懐かしい風の吹く草原に。

「俺の世界を打ち消す……いや、塗り替えたのか。魔術だったか……人間……元人間にそんな事が出来るとはな」

「ハルピュイア、いいかい？」

敢えてヨコシマを見ない。

そのあり方を知ってしまえばきっと、彼に剣を向ける事は出来ないから。

「ーーはい、いつでも」

ハルピュイアが周囲の風を集め、僕の持つ吉備津刀とカリバーンに注ぎ込む。

片手なので、指の間に挟むように二本の刀を手にする。

その全ての力を混じり合わせ、解放された世界にすら力を干渉する。

「ふむ、凄まじい力だ。彼の槍にすら迫るランクの力だ」

「余裕……か。しかし、持てる力の全て、受け取ってもらうよ……発動、竜の殺息（ドラゴンブレス）！」

僕は、光の奔流に呑まれそうになりながらも、その溢れる力をヨコシマに撃ち込んだ。

消える僕の固有結界「力無き弱者の歌」。

流石に魔力不足で座り込む僕。

しかし、これだけでは足りない。

そう感じる。

ヨコシマの周囲で純白の羽が舞う。

「やはりレジストしてるか……ハルピュイア、僕をヨコシマの所へ」

「マスター！？　無茶です！！」

聞く耳持たずに、僕は気術と魔力を合わせ黒く輝く大剣を造りだす。

「マスター……はぁ、私は三国一のマスター孝行の守護者ですよ。騒ぎなさい、そよ風よ」

僕の体は風によって浮かび上がり、ヨコシマ目掛けて吹き飛ばされる。

「魔人皇ヨコシマ！　これが僕の１００％中の１００％だぁ！　発動、天術、柔剛相交！」（ワレモチウルチカラヲアワセマジワラン）

更に干渉する純白の羽を掻き消すヨコシマに、神をも滅する討神の刀「早風」で斬りつけた。

「これ以上は無理だ！　クロウ、ミリア、お疲れ様。痛かっただろう」
「……どうでしょうか？　魔人皇は……」
「いやいや、本気で大したものだ。まさかここまでやるとは……」

声と共に光が僕を貫いた。

「がはっ！　ヨコシマ……」
「マスター！？」
「まさか、文殊を消費するとは思わなかったぞ。
経験と修行を積めば、最高指導者に迫るかもしれないな。
だからこそ残念だ。ここで、こんな手段をとらなければならない事が」

やはり駄目か。彼の考えも、世界にも選ばれる事はなかったようだ。

出来るだけの事はやった。それでも無理なら仕方ない。

彼はこうやって、世界に干渉を続ける全てと戦いながら、絶望を感じていくのだろう。

僕は、魔人皇ヨコシマを見ながら彼に憐れみを感じてならなかっ

た。

そして、僕はこの空間からもその姿を消した。

第四章、お帰りなさい。そして、いってらっしゃい（前書き）

これからまた忙しくなるのは確定的なのですが、不定期でも再開しようと思います。

待っていてくれた方がもしいたら感謝感激、恐悦至極に御座います。

一寸だけ女神転生系・ＦＦ１１系のネタ（技やモンスター）が入って行きますので、それでもいいよ。という心の広い方、どうぞごゆるりとお楽しみ下さい。

第四章、お帰りなさい。そして、いってらっしゃい

「おお、シズマ君。死んでしまうとは情けない」

顔に何かかけられている。

今の声からすると、我が主であり、有り得ないくらい我が儘な幼女である創造神ブラフマー様みたいだ。

きっと白い布だろうな。頭に三角の布もつけられてるかもな。

「む、誰があやしいおんなと書いて妖女だって？　そんな事いっちゃう悪い子にはこうだよ！　これはメラゾーマじゃない……」

妖女じゃないし！　ホワイトロリータ的な幼女だし！

しかも、その言葉から続くのは……！？

「ちょ！　一寸ま……！」

「メラだ！　って、動いちゃ駄目だよ！」

回避行動を取ろうとした僕が目にしたのは、一寸した隕石よりもデカい炎の塊が迫る所だった。

「ぐあああああああ！！」

「ああーーシズマ君ごめーん！」

こうして僕の冒険は終わった。

「うう……シズマくーん……足が痺れたよう」
「駄目です！　偶には反省して下さい！　いつもいつも漫画のネタばかりやってばかりで……僕がどれだけ苦労してるか」

いつもの事なんだけど、ブラフマーに反省を促しながら現状把握につとめる。

確か、妙神山で赤子の姿の横島忠夫に出会った事で、魔人皇ヨコシマと相対した。

そして、力及ばず世界から消えたんだ。

今回は失敗か……残念だな。

世界との取り決めで、失敗した世界に戻る事は出来ないし、得た技術を返す事も出来ない。

僕が不甲斐ないばかりに、ハルピュイアをＧＳ美神の世界から切り離してしまった。

はぁ、なんて言って謝ろう……。

「シズマくーん。もう勘弁してよぉ。悪気はなかったんだよー」
「……もういいですよ。ブラフマー様、ただいま帰りました。まず何をすれば？」

正座を崩して痺れた足を押さえていたブラフマー様が、僕の言葉にぐるん！　と顔を向けてくる。

「お土産！　土産話だよシズマ君！！　早く、さあ早く聞かせて、今すぐ、それすぐ、速攻で！」

「……ブラフマー様、テンション高すぎでしょう」

元気になったブラフマー様が、僕の経験を閲覧する。

さて、なんて言われるやら……。

「……シズマ君。契約したハーピーちゃんは喚べる？」

「え……はい、大丈夫だと思いますが……行使！　召喚、ハルピュイア！」

無の空間に風が収束して、今一番会いたくなかった存在、旋風の精霊ハルピュイアが召喚される。

「ここは……マスター！？　ご無事ですか！　お怪我は！　っと……ここ……は……確かマスターの記憶だと、マスターの主様のブラフマー様の世界ですね。ならば、やはりマスターは死んでしまったのですね……」

僕の姿を見つけて、掴みかからんばかりに迫ってきたハルピュイア。

そして僕が外傷ないのがわかると、周囲を見回して状況を把握したように落ち込みを見せる。

「ごめん、ハルピュイア。僕に力が足りなかったばかりに、君を神界だけでなく、世界からも隔てさせてしまった」

「……マスター」

「僕は間違えてしまった。世界の鍵である横島忠夫を守らんばかりに、彼本人に対する配慮を忘れていた。結果、僕がいる。という事象自体が世界を滅ぼす原因となってしまったんだ」

今更わかっても既に手遅れなんだけどね。

帰る場所も既にない。僕の召喚獣として存在が確定してしまった今、僕はハルピュイアに謝る事しか出来ない。

「マスター、何か勘違いしてませんか？」

「ハルピュイア？」

「始まりこそは違えど、私はマスター、シズマ＝ラインズという存在と、共に在りたいと感じたからこそ主従契約を結んだのです。マスターは一時的に動く駒として私を使うつもりだったのですか？」

なっ！？　そんな馬鹿な！！　僕はハーピーをハルピュイアに戻して神界に返してあげようとは思ったけど、決して半端な気持ちじゃない！

「まあ、そうじゃない事はわかってますが……だからこそ、そんな事で謝らないで下さい。私はいつまでもマスターと共にあるつもりです」

「ハルピュイア……有難う。これからも宜しく」

「はい！　勿論です！」

よかった。ハルピュイアは僕を受け入れてくれた。それだけが気がかりだった。

「良かったね、シズマ君。羨ましい位の仲の良さだね」
「はい。無念さはありますが、これで一応の心残りは有りません」
「マスター、この方が？」

僕の記憶があるから、あくまでも確認だろうけど。

そう言えば自己紹介してなかったな。

ブラフマー様も知ってるだろうけど、双方に相手を紹介する。

「ブラフマー様ですか。私のような若輩者、お目通し叶っただけでも光栄です」
「気にしなくていいよ。シズマ君の家族なら、私の家族だからね」

なんか二人とも仲良いな。

女性同士？　だから何か感じ合うものがあるのかな？

「さて、シズマ君。私は今とても機嫌が悪いの」
「いや、とてもそうには見えませんが……」
「ブラフマー様、お紅茶のおかわりは如何ですか？」
「あ、飲む飲むー。戸棚に入ってる栗どらも出してー」

唐突に不機嫌と言うブラフマー様。

しかし、給仕さんよろしく紅茶を振る舞うハルピュイアに、即座に上機嫌になる。

「もぐもぐ……ぷはぁ！　でね、私は今回あの世界の神々の打診を受けて、シズマ君を送り出したんだ。それなのにあの新米破壊神は……これじゃあ、私の沽券にかかわるんだよ！」

神様には神様のルールがあるんだなぁ。

「と、いう訳でシズマ君には、私の力の一部を継承してもらうよ」

……はい？

「なにを……」

「魔人皇ヨコシマに勝たないと、あの世界には行けないからね。今のシズマ君なら多分受けられると思うから、頑張ってね」

「一寸！　待っ――がぁぁぁぁぁぁあ！！」

言った瞬間、体中にブラフマー様の力が流れ込む。

「マスター！　ブラフマー様、流石にマスターにはまだ無茶なのでは！？」

「あれ？　シズマ君頑張って。消えちゃうよー」

二人の声も聞こえない位にのたうち回る僕は、そのまま意識を失った。

「うう……シズマくーん……足が痺れたよう」

「駄目です！　直前に言ったばかりじゃないですか！　全くもう……反省して下さい！　いつもいつもいつも無茶ばかりやって……僕がどれだけ苦労してるか」
無事ブラフマー様の力の一部を得たらしい僕は、消滅の危機を乗り越えてまたブラフマー様に正座の刑を与えている。

「いつも、が先程より一回増えましたね」
「それにしても、僕はどうなったんだろう？」

ブラフマー様の力って何なんだろう？

何であっても、僕なんかが扱いきれるとは思えないんだけど……。

「じゃあ試してみようよ！　それ！　いでよ、みどりさん！」
「わっ！　急に立たないで下さいブラフマー様」
「いや、ハルピュイア。突っ込む所はそこじゃない！　自分で与えた能力わかってなかったんかい！　そもそもみどりさんって……ドラゴンじゃないか！」

立ち上がったブラフマー様が指を鳴らすと、そこには巨大な深緑色の竜がそこにいた。

その威圧感は、以前別の世界で相対した竜の比ではない。

「イヤイヤ、チャントワカッテルヨ……多分。
さて、とりあえずこのドラゴンを私が与えた力だけで倒してもらおうかな」

一寸、ハルピュイアと密談。

「この竜は、以前の奴とどの位違うと思う？」
「私の感が確かなら、１０倍以上は離れてますね。分かり易く言うと、マスターレベル９９。敵ドラゴンレベル９９９と言った感じですね」

違いすぎない？　これが若さ……じゃない、人と幻想種の違いか。

「無茶じゃないかなぁ？」
「いえ……私の考えが正しければ、恐らくは……」

何か気付いたのか？　僕は体感で特に変わりないけど……。

「もういいかな？　じゃあ、説明するね。シズマ君にはエインヘリアルの力を与えたんだ。簡単に言うと、凄く強い召喚術……かな」

召喚術？　エインヘリアル……神の戦士が？

促されるままにクロウを召喚する。

「じゃあ、言葉でエインヘリアルを与えてみて」
「エインヘリアルを与える？　クロウに伝えればいいんですか？　クロウ……お前をエインヘリアルとする……」

突如、黄金色に輝くクロウ。
オーラに包まれると言うか……それだけで何十、何百……いや、何千倍とも思える位に力を増している。

「うん。上手く継承されたね。じゃあ、後はいつも通り指示を出しながら、その子を倒してみて」

「これはまたいまだかつてないチートだね」

とりあえずクロウに指示を出して、ドラゴンへと向かわせた。

「うんうん、期待通りだね」
「そんな……馬鹿な」
「いやいや、凄まじいですね」

今、僕の目には傷だらけで倒れ伏すドラゴンと、無傷で飛び回るクロウが映っている。

「ハルピュイア、クロウの力どの位になってるの？」
「ええと、平時がレベル４５ですね。エインヘリアル効果時はレベル４５００です」
「なんだ、そんなものなんだ。まあ、シズマ君も慣れてないから仕方ないよね」

＋１０００倍でも駄目なんだ。
まあ神様の力なんだから上限があるだけ、未熟なんだろうなぁ。

「この世界だから１０００倍位なんだろうね。外の世界じゃあ、シズマ君の熟練にもよるけど2倍～１０倍位が限度かな？」

「後、その影響なんでしょうが、私達召喚獣の基礎性能が上がっています。大体＋１０程度でしょうか？」

そんな神スキル……って、実際に神のスキルな訳だけど。
いいのかな？　レベル１のスライムを召喚獣にした場合でも即座にレベル１１。エインヘリアルを使用した場合は、レベル２２～１１０まで上がるって事か。

凄まじいな。

「有難う御座います、ブラフマー様。必ずや期待に応えて見せます」
「うん、頑張ってね。じゃあ、楽しい土産話を待ってるね。行ってらっしゃーい」

そして僕等はまた、あの世界に舞い戻った。

主人公及び仲魔ステータス一覧（そのいち）

※スキルの威力は、魔力及び各種ステータスにより変動する為、基礎値のみ表示する事とする。

シズマ＝ラインズ
（静馬篠宮）

レベル９９

ＨＰ　７８４
ＭＰ　１２３０

力３５
魔４７
体３１
速５０
運２３

固有スキル

エインヘリアル
〔マスターが契約する全ての仲魔のレベルを熟練度×２～１０００アップさせる。及び、このスキルを持つマスターの召喚獣は常時レベルが＋１０される〕

竜炉心
（ドラゴンハート）
〔竜族の証、竜珠。効率的に魔力及び気術を返還する。
返還効率１対１００〕

竜の羽ばたき
（ドラゴンウイング）
〔風属性。自身及び周囲の全属性ダメージを３００吸収する。
他者、範囲を拡大するとその吸収率はダウンする〕

竜の殺息
（ドラゴンブレス）
〔光属性。対象に威力３５０の後に追加１３０×１～５０の魔力ダメージを与える。
※使用制限、固有結界、力無き弱者の歌発動時のみ〕

真名解放
（マスターオブドラゴン）
〔自身の竜の力を解放する
※使用制限、固有結界、力無き弱者の歌発動時のみ
※使用制限、対象は自身もしくは召喚獣クロウ（鴉）のみ〕

格闘術
（気孔弾、コンボ、タックル、短勁、バックハンドブロー、乱撃、スピンアタック、空鳴拳、双竜脚、夢想阿修羅拳、ファイナルヘヴン）

剣術

約束された勝利の剣
（吉備津天地刀）
〔光属性。対象に威力２００の魔力ダメージを与える〕

勝利すべき黄金の剣
（カリバーン）
〔光属性。対象に威力１５０の魔力ダメージを与える〕

魔術

召喚術

契約召喚獣
・クロウ（鴉）
・ミリア（ハウンドウルフ）
・ハルピュイア（旋風の精霊）

投影魔術

固有結界
「力無き弱者の歌」
〔現実を浸食する心象世界を具現化させる〕

空想具現化
（マーブルファンタズム）
〔自然界の物を自らの意思で変化をさせ、空想を具現化させる力〕

無駄なしの銃
（フェイルノート）
〔光属性。威力１～１２０の魔力ダメージを与える。魔力で創造した銃。スキルや魔術を込める事が可能。※使用制限、召喚獣ミリア媒体時のみ使用可能〕

王の財宝
（ゲートオブファンタズム）
〔異空間から自らの所有する（投影可能な）道具を出現させる〕

壊れた幻想
（ブロークンファンタズム）
〔投影した武具を爆発させる。威力（武具の神格×）５の魔力ダメージを与える〕

気術

天術
〔気術と魔術を融合させた無の力。　全ての天術は、シズマ＝ラインズが使用した場合に限り威力が＋３０される〕

柔剛相交
（　ワレモチウルチカラヲアワセマジワラン　）
〔無属性。天術。威力４００の無属性ダメージを与える。このスキルは対象の如何なる防御スキルを無効化する。
※使用制限、早風、創造時のみ〕

早風

〔無属性。天術。天術により創り出した無の刀。　威力２の無属性ダメージを与える〕

超電磁砲
（レールガン）
〔電撃属性。威力８０の念動ダメージを与える〕

真・超電磁砲
（ハイレールガン）
〔電撃属性。威力１２０の念動ダメージを与える〕

影分身の術
〔疾風属性。自身及び自身の所有する武具を複数複製する。
※分身体の耐久度は１、威力は３０％となる〕

召喚獣

クロウ
（鴉）

レベル４５

ＨＰ１２２
ＭＰ３５

力１２
魔１１
体８

速３５
運３

固有スキル

突撃
〔無属性。威力５の物理ダメージを与える〕

羽ばたき
〔衝撃属性。範囲に威力１０のダメージを与える〕

電磁砲
〔電撃属性。威力１５の念動ダメージを与える〕

真名解放
（マスターオブドラゴン）
〔上記同様〕

ミリア
（ハウンドウルフ）

レベル１３

ＨＰ８３
ＭＰ４４

力７
魔１２
体９

速１３
運１０

固有スキル

突撃
〔無属性。威力５の物理ダメージを与える〕

体当たり
〔無属性。威力７の物理ダメージを込与える〕

ブフ
〔氷結属性。威力５の魔力ダメージ＋一定確率で氷結効果を与える〕

無駄なしの銃
（フェイルノート）
〔上記同様〕

ハルピュイア
（旋風の精霊）

レベル２７
ＨＰ１７１
ＭＰ１２０

力９
魔２１

体８
速２９
運１５

固有スキル

フェザーブレッド
〔疾風属性。威力３５のダメージを与える〕

羽ばたき
〔衝撃属性。範囲に威力１０のダメージを与える〕

ガル
〔疾風属性。威力５の魔力ダメージを与える〕

マハガル
〔疾風属性。　範囲に威力５のダメージを与える〕

第五章、ただいま、未だ見ぬ世界より（そのいち）（前書き）

※変更・追加したステータスは、各章終了後に別個章を設けて記載します。

第五章、ただいま、未だ見ぬ世界より（そのいち）

ひらひらと落ちる細長くて赤い布。

それは僕の手から落ちたもの。

「はっ！　ここは……」

「マスター、この場所。それにそのバンダナは……」

声を受けて周囲を見回してみる。

見慣れた和風の建物。これは妙神山の玄関部分だな。

周りには僕の召喚獣のハルピュイアに鬼門の二人。

それに僕の師匠となっている妙神山管理人、小竜姫様。

「篠宮さんにハルピュイアさん。急にどうしたんですか？　それにこの赤い布は？」

「バンダナ……だけ？　横島忠夫は？」

「恐らく歴史が変わったのでしょうね」

話を聞くと、不意に僕等が玄関に走り出し、自分達が来たときには既にバンダナを持っていたらしい。

「全く変な篠宮さんですね」

「我らを呼び出して、そんな何でもない布を見せつけたかったのか。右の、仕事に戻るぞ」

「応！」

何も無かったかのように、持ち場に戻る鬼門。
「大丈夫ですか？　どこか調子悪いのでは……」
「いえ、大丈夫です……失礼しました。ハルピュイア、戻ろう」

そしてバンダナを手に部屋に戻った僕等は、その後何日も何事もなく過ごした。

ある日の夜更けの事……。
「やはり行かれるのですか？」
「……やはりわかってましたか」

ハルピュイアは僕の中に戻してある。

長い廊下を振り返ると、そこには小竜姫様がいた。
「雰囲気が違いましたから……あの、篠宮さんが赤い布を見つけた日から」

お見通しか。僕は横島忠夫の所に行かなければいけない。

「止めますか？　僕を」
「まさか。修行者が自らの意思で山を降りたいと言うのを止める資格はありません」

目には闘気が宿ってる。これはやはり……。

「……ただし、最後に私の修行を受けてもらいます」

「あの魔法陣を使った修行ですね？」

「ええ、篠宮さんには何か感じるものがあります。

非常に残念ですが、篠宮さんは人間界の私より強いです。しかし、この妙神山ならばまだまだ私に一日の長があります」

あの最難関の修行かぁ。

あれをやると僕が竜族なのがバレちゃうんだよなぁ。

「ダメ……でしょうか？」

そんな半泣きで上目使いで言われると……。

「いえ、いいですよ。やりましょう」

最後……でも無いだろうけど、受けた恩に報いる為その修行を受ける事にした。

「やっぱり見つかっちゃいましたか」

「わかってたんだ？」

「マスターは鈍感ですから……」

また変な事を。鈍感は関係ないんじゃないの？

場所は異空間の修行場。

専用の服に着替えた僕は、呼び出したハルピュイアと準備といって離れた小竜姫様を待っていた。

「やっぱり夜でも異空間は変わらないんだ」
「それはそうでしょうね。時間も空間も関係ないんですから」
「お待たせしました。じゃあ、篠宮さん。そこの陣を踏んで下さい」

さて、吉と出るか凶と出るか。

恐る恐る魔法陣の上に立つ。

これは影法師を作り出す魔法陣。
竜族の僕が踏むと……。

「……変わらない、か」
「そうですね……嬉しい誤算です」
「もっと凄いものがでると思ったのに……」

竜になると思ったのに、変わらなかったな。
円の中にあらわれたのは、僕と全く同じな正にコピーといえる存在だった。

考えてみればそうか。
元々の僕は霊体みたいなものだし。

「まあ、いいか。じゃあ始めますね。いでよ！　剛練武！」

小竜姫の呼び出しに応じて、同じく円の中に出現したのは岩で出来た一つ目のゴーレムだった。

「ハルピュイア。これにはエインヘリアルの効果があると思うか？」
「恐らく、マスターの所有する全ての存在に効果があると思われます」
最後に小竜姫様が相手になるんだ。
基本は必要ないだろうけど、保険はあるに越した事はない。
剛練武はその力故に、スピードが大幅に削られているがその破壊力は侮れない。
弱点は岩に保護されてない目。しかし、その胴体はどこまで硬いんだろうか？
「試してみるか」
僕の指示を受けて影法師が動く。
その拳を剛練武の胸元に叩きつける。
「痛ぅ……やはり硬いか。でも、対処出来ない程じゃないな」
僅かに拳力で後退した剛練武。
全く無駄ではないと感じた僕は、弱点狙いではなく武で挑む事にした。
「篠宮さん……やはり非常識です」
「まあ、こんな事をするのは我がマスター位でしょうね」

二人とも呆れてるなぁ。
僕は正面から剛練武と殴り合っている。
その岩の腕は恐ろしい威力を誇るから、受け流す事がメインになるけど。
「楽しいなぁ、剛練武！　その巨大な存在、力、鉄壁を誇る体。その全てがとても楽しいなぁ！」
「ウゴアアアアアア！」
剛練武の拳と影法師の拳が正面からぶつかり合った。
「剛練武が吠えた……」
「そんな、あの忠誠心が強い剛練武が話すなんて……」
剛練武も限界みたいだな。
だんだん動きが悪くなってきた。
「剛練武。最上の力を込めてこい！」
「ウゴアアアアアア！」
両手を握り締め、頭上から振り下ろしてくる剛練武。
僕は、左手に気を込めてそれに応える。
「発動！　拳技、短勁！」
ぶつかり合った力は光となり、眩しい位に広がっていった。

「勝負あり！　勝者、静馬篠宮！」

ボロボロになり座り込んだ剛練武に話し掛ける。

「剛練武、楽しかったよ。有難う」

「ウゴウゴ！」

握手を交わす影法師と剛練武。

友情、芽生えたかな？

「マスター、まずは一勝。おめでとうございます」

「ああ、有難うハルピュイア」

僕の前に立つ小竜姫様。

忘れてたけど、勝ったら能力を貰えるんだったっけ？

忘れてたよ。

「篠宮さんにしか出来なそうな戦法ですが、お見事でした。では一個目の力ですが……」

「ウゴウゴウゴウゴ！」

「はい？　何ですか、剛練武……ええ！？　本気ですか！？　しかし、それは……」

そのやり取りを正面から見ている僕ら。
剛練武の訴えに、小竜姫様が大分困っているみたいだ。

「どうしたんだろう？」
「さあ？　剛練武さんが、友情の証に特別ボーナスでも陳情しているんでしょうか？」

ハルピュイア、天界・魔界を行き来した精霊の筈なのに考えが俗っぽいなぁ。

「……マスターの知識が、私の人界に対する全知識なんですが？」
「おっと。こりゃまた一本とられたなぁ」

なんて事をしている内に……。

「はぁ、わかりました。でも、珍しいですね。貴方がそこまで武人に惚れ込むなんて……」
「ウゴ！」
「いいですよ。その代わり、分霊だけですよ」

歩いてきた剛練武は、小竜姫様の隣に立つ。
もう歩いて大丈夫なんだろうか？

「あの、小竜姫様。剛練武はもう歩いても大丈夫なんでしょうか？
結構力一杯殴っちゃったんですけど」
「大丈夫ですよ。彼はこの妙神山で生まれました。ある程度時間が

あれば、すぐに全快します。この位ならもう平気です。ね？」
「ウゴウゴ！」
「……強くて、優しくて、紳士的。確かに剛練武が惚れ込むでしょうね。
さて篠宮さん。貴方に与える力ですが、その身に今以上の防御を、と思いましたが……止めました」

ええ！？　どういう事？

確かに失念していたけど、ボーナスなしって事？

「代わりに……剛練武の強い希望で、貴方が望むなら彼と契約する事を許可します」
「へ？　そんな！　いいんですか？　僕はこの後、人界に帰る身ですよ！」
「わかっています。なので、剛練武の分霊との契約です。それならば、人界でも支障ないでしょう」

はぁ、と一つ息を吐いて剛練武を見やる。

「申し出はとても嬉しいんだけど……僕といると後悔するよ？　ひょっとしたら君は世界から切り捨てられるかもしれない？　その時、全てを捨てて僕と共にいる覚悟はあるかい？」

なんだか試すみたいな言い方になってしまったけど、これはブラフマー様の戦士である僕には避けては通れない事。

僕と契約するというのはそういう事なんだから。

「ウゴウゴ！」

「構わない……だそうですよ。まるで川縁の土手で殴り合った後のライバルみたいですね」

またそんな事言って……。

でもそれならば……。

「わかった。喜んで君と契約させてほしい。僕の相棒になってくれるかい？」

「ウゴ！」

こうして僕は、妙神山修行場の最難関の修行（小竜姫様的に）の難関を潜り抜けた。

そして掛け替えのない戦友を得た。

後、二連戦だ。

「全く……非常識です」

「まあまあ、それが我がマスターですから」

剛練武の分霊は一つ目で岩で出来た剛練武じゃなくて、通常のゴーレムだった。

なんでも、呼び出した時にある素材から出来るゴーレムが違うらしい。

第五章、ただいま、未だ見ぬ世界より（そのに）（前書き）

ちなみに旋風と書いてつむじかぜと読みます。

第五章、ただいま、未だ見ぬ世界より（そのに）

「では次の相手です。篠宮さん、準備はいいですか？」
「ええ、問題ないです……あの、僕は召喚術は使ってもいいんですか？」

小竜姫様は魔法陣から出て僕の隣であぐらをかいて座っている剛練武と、異空間を行き来してお茶やお菓子、テーブルや座椅子を準備しているハルピュイアを見る。

「……駄目です。契約した仲魔は篠宮さんの自力ではありませんから。
仲魔の熟練も、ここ（妙神山）では承っていますが、今は内容が違います。
それでは篠宮さんの修行にはならないので……まあ、篠宮さんなら次も大丈夫ですよ。その後の相談は、その時にお受けします。
では……禍刀羅守でませい！」

次に円にあらわれた僕の相手は……まあ原作を知ってる僕には予定通りなんだが、手足が刀の蟻みたいな幻獣であった。

「グケケケー！！」

前足？　を振るって異空間にあるストーンヘンジ状の岩を切り裂く。

「フフン！」

切れ味や俺つえーをアピールしたかったんだろうけど……。

僕の記憶を得ている天界の精霊ハルピュイア、この妙神山管理人の小竜姫様、同僚の剛練武、様々な世界で非常識な力を持った存在と相対して、更には創造神ブラフマー様を主に持つ僕。

正直あの位だったら、ここにいる皆がよりハイクォリティな事をやる事が出来る。

あ、小竜姫様、頭抱えてるし。

「えっと……小竜姫様？　今回の試練に関しては、僕の為のものなんでしょうか？」

「うう……すみません。一応篠宮さんの為なんですが……お察しの通り、禍刀羅守の為でもあります。

お願い出来ないでしょうか？　彼も力はありますから……」

なんか、叱れない親が変わりに活をいれてくれって言ってるみたいだ。

「その通りじゃないんですか？」

「ハルピュイア、考えを読むな……わかりました。一寸、教育します」

「ググ！　ケケケー！！」

まあ、怒るよなぁ。修行者の指南だと思って来て、格好までつけたのに実際には自分へのバッシングだったんだから。

不意打ちとばかりに腕の刀を振るってくる。

「なっ！　禍刀羅守！」
「まあ、これも想定内だよなぁ」
「ですね」

全くもって予定通りの反応に、僕の影法師も即座に反応する。

「グギャアアア！！」
「さて、次は……と」

振り下ろされた刀を掴むと、そのまま真上に放り投げる。

そして、先程禍刀羅守に切り落とされた石柱を掴む。

「禍刀羅守！　これが切り落とされた石柱の痛みだぁ！」
「グギギャアア……！！」

落ちてきた禍刀羅守を、石柱でホームラン打者を真似て更に上空に打ち上げる。

「次はこの空間の破損を直す誰かの分！　次は優しい小竜姫様の指導をしっかり受けないせいで、小竜姫様が感じているストレスの分！　次は僕の修行なのに、何故かこんな事になっている僕の感じているストレスの分！」
「……すみません、篠宮さん」
「気にしなくていいですよ、小竜姫さん。あれは好きでやってるんですから」

うるさいやい。

「そしてこれが僕の全員分の怒りを凝縮させたコスモだぁ！！！」
幾度となく打ち上げ続け、最後に力一杯地平線まで飛んでいくように、ジャストミートさせた。
彼は、結界を突き破って異空間の彼方に飛んでいった。
「あ、まだ開始の合図出してませんでした……」
「その反応、小竜姫さんも中々いい性格してますね」
全くだ。こんなだったっけ？　小竜姫様って。

自慢の刀でバランスを取れない位にボロボロの禍刀羅守を、僕の影法師が引きずって帰ってくる。
「篠宮さん。私、試合開始の合図をしてなかったんですが、どうしましょうか？　元々は、禍刀羅守が開始前に手を出したのが原因なんですが……」
「僕はやり直しても構いませんよ。
やはり禍刀羅守もこんな決着じゃあ納得出来ないでしょうし……回復させて、本人に聞いてみましょうか」
あれで、あの傲慢でナルシストの性格が改善するとかおもえないし。

「わかりました、有難う御座います、篠宮さん。禍刀羅守、篠宮さんはこう言ってますが、どうしますか？」
「グ、ググギギギ！」
凄い勢いで首を振り続ける禍刀羅守。
やりすぎたかなぁ。
禍刀羅守は僕の前に来ると、前足を倒して平伏の姿勢を取る。
ええっと、これは……。
「どう思う？」
「マスターもわかっているんでしょう？　絶対服従の姿勢ですね」
「やっぱり。やりすぎたかぁ」
「まあ、あの恐怖は空を飛べない者には恐怖でしかないでしょうからね」
そして、僕はもう一体召喚獣が増える事になった。
禍刀羅守の分霊は、リビングソード（動く刀）の形であった事を述べておく。

「一応、妙神山で最も危険な修行なんですが、篠宮さんにはあまり効果がないみたいですね」
「まあ、我がマスターですから」
「ハルピュイアさっきからそれしか言って無くない？」

なんだかんだでいよいよ最終ラウンド。

次は小竜姫様か……結界内で神界同様の力を振るう彼女に、どう対処したものか？

既に溢れんばかりの闘気が周囲に満ちているんだけど……。

「小竜姫様、目的と手段が入れ替わる時があるからなぁ」

「……マスターもそうですがね」

それはいいの。僕は主人公なんだから。

「ん？　じゃあ、最後の修行になるんですが、宜しいですか？」

「勿論宜しいです。はい」

「日本語変ですよ、マスター」

いいの！　僕は元々日本人じゃないんだから。

見た目は日本人そのものだけど。

「では！　最後の相手は私になります」

「ですよね。で、ご相談なんですが、小竜姫様と対するのにも召喚獣と一緒では駄目なんですか？　力を全開に発揮できるこの異空間じゃあ、あまりに不利すぎるんですが……」

自身と人間である（と小竜姫様が思っている）僕との戦力差を考える小竜姫様。

「まあ、戦ううちに余りに差があるようならば、対応しますよ。それでいいですか？」

「絶対忘れる。絶対耳を傾けない」
「何ですか？」
神剣に手をかけながら聞き返される。
交渉の余地なし……か。
「わかりました……それでいいです」
「はい！　じゃあ、始めましょうか？」
小竜姫様が円の中に入る。
すると姿がノイズがかったように変貌する。
「小竜姫様、せめて真鍮の手甲を貸してもらえませんか？　流石に素手は……」
「いいでしょう。ではこれを」
空に現れた手甲を装着する。
「じゃあいいですね。もう待ちませんよ。行きますよ！　開始！」
いや、興奮しすぎだろう。
そして、今回の訪問での妙神山最後の戦いの幕が切っておろされた。
「だあ！　脚技、双竜脚！」

迫る剣戟を局所的に凝縮させた気を使い、受け流しながら反撃に移る。

「流石ですね。本気ではないですが、今の状態の私の攻撃をここまで回避するとは……」

そりゃ、こっちも命がけだしなぁ。

「おわっ！　まさか真鍮の手甲にひびが入るとは……もう保たないな……発動、短勁！」

速度、威力は平時と桁違いなので、全てを回避なんてとても出来ない。

なんとか手甲のおかげで直撃はないが、それもいつまでもつかわからない。

「甘いですよ！　ではこれならどうです！」

「なっ！　剣を！？　しまっ！　フェイントか！？」

小竜姫様はその神剣を投げてきたのだ。

意表をつかれた為、不意にかけられた足払いを受けて転倒してしまう。

「私も篠宮さんと何度も手合わせしたのです。その鉄壁ともいえる防備を崩す為の手段位考えます」

「創意工夫結構だけと、少し大人気ないんじゃあ……ぐはぁ！」

即座にマウントポジションになった小竜姫様の、公開顔面殴打ショーが始まる。

「貴方に！　わかりますか！　修行に来た人間に負けて神界で小隆起等と言われるる私の気持ちが！」
「だ！　わか！　わかったっ！　わかったから落ち着いて！」

今の状態で全て受けると、流石にブラフマー様の所へ逆戻りなので、持ち前のフットワークで顔を右左に振って回避を試みる。
「わかっていません！！　それなら責任を取ってもらえばいいじゃないかと言ってくる同僚達に私もそれもいいかもしれない等と考えていた矢先に貴方は妙神山を降りると言うし……私は一体どうすればいいんですか！？」

はぁ、なんか大変だなぁ。神界も。

独白が続き、手が止まった小竜姫様を顔だけで見上げる。

「随分過激な告白ですね、小竜姫さん。まるで傷物にされたから責任を取って嫁にしなさい。と言ってるように聞こえますよ？」
「なっ！？　ち、違います！！　ハルピュイアさん、変な事言わないで下さい！　わ、私は、ただ……その、あのですね……私は、私を苦もなく一蹴出来るような強く、優しいお方がいればいいな。とは常々思っていましたが、別に、そ、そ、それが篠宮さんの事だとは……確かに篠宮さんは強いし、私に意地悪する事もありますが、ちゃんと案じてくれます。でも、それとこれとは別問題です！！」
「よいしょ。てい！」
「え？　きゃっ！？」

なんか、ハルピュイアと話をする為に僕から離れた小竜姫様。勝負中ですよ？

隙だらけだったので、投影した紐でぐるぐる巻きにして床に転がして見る。

「よし！　僕の勝ちぃ！」
「なっ！？　卑怯です！」
「流石我がマスター。中々の鬼畜っぷりです」

どこが？　勝負の最中に隙を見せるのが悪い。

「くっ！　こんな紐！　ええい！　たぁ！　って……いない？」

ただの紐だった為、即座に引きちぎって僕に斬りかかる。

しかし、斬ったと思ったらそのまま笑顔で姿を消す僕に、違和感を感じる小竜姫様。

「……残像だ」
「しまっ！　あっ！　駄目！！」

影分身で回避した影法師は、迷う事なく背中にある逆鱗に触れた。

「さて、小竜姫様を暴れまわるドラゴンに変貌させてみたけど、どうしようか？」
「一体どのようなおつもりで？」

影法師を消して、赤い毛並みの白い竜となった小竜姫様。
原作通り、まだ上手く制御出来ないみたいで暴れまわっている。

「うん。今回の事でのせめてもの恩返しに、抑圧された感情のはけ口になろうかな、と思って」
「確かに何も考えず暴れればすっきりしますしね。マスター、意外と話聞いていたんですね？」

あんまりは……疲れてるなぁ、と思っただけなんだけどもう言える雰囲気じゃないな。

「さて、じゃあ巨大なお世話でもしますか！　発動、召喚！　クロウ、ミリア、剛練武、禍刀羅守！　行くよ皆！　準備はいいかい？」

全員を召喚して妙神山最強のドラゴン遊戯をする事にした。

第五章、ただいま、未だ見ぬ世界より（そのさん）

「ミリア、お前をエインヘリアルに命ずる！　行け！」

召喚したハウンドウルフが黄金色に包まれる。

「ガウア！！」

一声あげて、自身の周囲に複数の氷結の塊を作り上げる。

全ての氷結は鋭い刃（ブラ）となり、白き竜に迫る。

白き竜は回避行動すら取らない。

敵意を向けたミリアを睨みつけているままだ。

「ギャオオオオオ！」

無数のブフはそのまま白き竜に突き刺さる。

「グルル！　ガオゥ！」

そして突撃したミリアは、体格が５０倍は違うその巨体を吹き飛ばす。

「これがエインヘリアルの効果か……凄いなぁ」「そうですね。平時の二倍……と言った所ですね。どうやらスキルダメージも二倍みたいです」

成る程。レベルだけじゃなく、スキルも等倍になるのか。

全く有り得ないな。この神スキルは。

「ウォオオン！」

「深追いするな！」

「ギャオオオオオン！」

追撃態勢のミリアを、倒れたままの白き竜の稲妻が貫いた。

「く、油断したか……」

「レベルは上がっても、経験は足りませんからね」

許容不能ダメージを受けてミリアは僕の中に戻る。

起き上がった白き竜は、改めて僕等を外敵と判断したのか広域の稲妻を辺り構わず放ち始める。

「無作為投射が一番厄介だな。発動、竜炉心、竜の羽ばたき（ドラゴンウイング）！」

僕は風の守りで身を守り、召喚獣達は各々回避、防御を取る。

そこまで器用に回避が出来ない剛練武は、ブロックした腕毎崩れ落ち、回避特化型じゃない禍刀羅守も電撃の雨に呑み込まれた。

「この辺は力量差が有りすぎますね。当たったら、幾らエインヘリアルを使っても、私達では一撃を耐えるのは不可能です」

「剛練武達じゃあ、今の二の舞か……現状の相性は悪そうだな。残

ったのはクロウ、ハルピュイアか。ミリアもまだ行けるか？　発動、召喚、ミリア！　皆、行くよ？君達全てをエインヘリアルに命ずる」

全ての召喚獣が黄金色に輝く。

使用制限とか、ペナルティとかないんかな？　この神スキルは……。

まあ、便利でいいけど。

「僕が前に出る！　……皆は最大威力で攻撃を仕掛けるんだ！　吉備津刀！　そして……開け！　我が王の財宝よ（ゲートオブファンタズム）！」

吉備津刀を手にして、同時に王の財宝（ゲートオブファンタズム）を発動させる。

「ん？　どうした！？　開け！　王の財宝よ！」

僕の王の財宝はうんともすんとも言わない。

いつもより魔力を込めてみる。

……反応なし。

……反応なし。

いつもより丁寧に展開を試みる。

「どういう事だ？」

「マスター！！」

ハルピュイアの声に反応すると、回避不可な位にまで白き竜の電撃が迫っていた。

「ぐ……竜炉心！！　おおおお！　くっ！　駄目か！　がぁあああ」

継続して展開していた竜の羽ばたき（ドラゴンウイング）に渾身の魔力を込める。

しかし、その威力の前に僕の竜の羽ばたき（ドラゴンウイング）は、いとも簡単に霧散した。

そして、凄まじい電撃が僕を襲った。

「マスター！　ご無事ですか！？」

「はあ、はあ、はあ、な、なんとかね……竜の羽ばたきが辛うじてダメージを吸収してくれたから……」

ふう、危なかった。優秀なスキルのお陰でなんとか助かった。

「でも、どういう事だ？　何故王の財宝は発動しない？」

「……マスター。今は……」

「そうだね。そんな事に気を取られている場合じゃないか。済まない。心配かけたね。もう大丈夫！　行こう！」

理由はわからないけど、王の財宝は使用不可。

なら、他の手段で戦うまでだ。

言いながら逆の手にダークを投影し、白き竜への攻撃を開始した。

白き竜の電撃の狙いを僕に向ける為、ダークを槍投げの要領で投擲する。

一回一回は大したダメージにならないが、攻撃をインターセプトし続ければ、狙いになるには十分だろう。

事実、白き竜は何度もブレスを吐こうとしているが、口腔内に侵入するダークのせいでそれもままならない。

「おおおお！！　だあ！」

振り下ろされた大振りの爪を蹴って飛び上がる。

そして、吉備津刀の背で力一杯頭を打ちつける。

「ギャオオオオ！！」

態勢を崩しながらも、空にいる僕に巨大な尻尾を振るってくる。

しかし地を蹴ったミリアが、僕を回収してくれる。

そして、空振りに終わったテールスイングを正面から見据えて、クロウとハルピュイアが、最早竜巻としか見えないような羽ばたきで白き竜を背後にある岩壁に打ちつけた。

「有難うミリア。なんとかしてくれると信じてたよ」

「ウォフゥン」

白き竜は本能で動いている為、武神小竜姫より動きが捉えやすいし、読みやすい。　それに、基本回避を繰り返しながらのヒットアンドアウェイな為、特に目立った外傷もない。

しかし、問題はその巨大な体だが……そこは経験と慣れとしかいいようがない。

更に僕には、回避不可の時の際の竜の羽ばたき（ドラゴンウイング）の発動もある為、未だ余裕がある。

「さて、次行きますよ！　風よ……マハガル！」

「クァア！」

白き竜の全身を包む衝撃に、口唇から放たれる電磁砲。

やはりかなりの電撃耐性があるみたいで、そのどれもがダメージは低い。

しかし、ゼロではない。徐々にそのダメージは体を蝕んでいくだろう。

「追随しろ！　発動、召喚、剛練武！　禍刀羅守！」

「ウゴ！」「ケケー！」

喚びだした剛練武は周囲に落ちている石柱を放り投げつける。

禍刀羅守はそのフォルムを四本の刀にして、まるでファンネルのように眼前の敵に襲いかかる。

僕もミリアを媒体に、無駄なしの銃（フェイルノート）を具現化させる。

「電撃は効果が薄い……なら込める力は……気孔弾！」

気の力を装填して撃ち放った。

「ギャオオオオオ！！！」

蓄積された痛みから逃れようとするかの如く、身悶えする白き竜。

次いで怒りに満ちた目で僕等を睨み付ける。

そのまま突撃してきたのを避けきれず、剛練武が消えた。

召喚→撃破される→再召喚。

を繰り返す。

どの位続けただろうか？

ダメージよりも、この終わらない戦いに対して疲労感を感じて来た様子の白き竜。

「もうそろそろいいかなぁ？　流石にしんどくなって来たね」
「この異空間が無くなりそうですし、いいんじゃないでしょうか？」

ダークの投擲を止めて様子を見る。

確かによく見ると、所々綻びが出て来ている。

「よし！　じゃあ、行くか！　ハルピュイア、道を作ってくれ。
クロウは羽ばたきで電撃を反らして。
剛練武は引き続き投石を。禍刀羅守は僕の近くであの爪を逸らして」

無駄なしの銃（フェイルノート）に装填した気孔弾を連射しながら、僕はこの戦い？に終止符をうつべく行動を開始した。

「ギャオオオオ！」
「クアァ！」
「させませんよ……フェザーブレッド！」

僕に放たれた電撃は、クロウの羽から巻き起こる疾風により当たる事はない。

口から吐き出された火球は、ハルピュイアの十八番、フェザーブレッドにより相殺される。

「ウゴ！」
「グケェ！」

振り下ろされる大爪を、禍刀羅守がその身を変質させた四本の剣で受け流す。

その隙に放たれた岩が直撃した白き竜が姿勢を崩す。

「グオオオアアア！」

しかし敵も理性がなくても伝説の剣聖。それだけでは終わらない。

先程同様その長い尻尾を横凪ぎに振るってきた。

「ミリア、変質！　跳躍」

「ウォウ！」

僕は咄嗟に無駄なしの銃を銃形態から召喚獣ミリアに戻して、跨り飛び上が事で回避する。

「発動、ヒヒイロカネ！　小竜姫様。僕がいた事で、随分貴女に面倒や苦労をかけたかと思いますが、この恩は必ず返させてもらいます……発動、拳技、ファイナルヘヴン！」

跳躍したミリアから更に跳躍して、より高みから白き竜を見下ろす。

そして気合いを込めると、拳を白き竜の額に叩きつけた。

異空間……辺りはボロボロ、荒野を連想させる荒れ地となっている。

僕等の前、その中心には馬鹿でかいクレーターが出来ていた。

僕の格闘術の奥義、ファイナルヘヴンの衝撃で出来たものだ。

「……眠ってるだけみたいですね」

「満足げな顔になったし、良かった良かった。皆もお疲れ様」

僕と苦楽を共にした召喚獣の皆にも礼を言う。

皆、口々に僕を労ってくれながら、僕の中に戻っていく。

「さて、よっこいしょっと……じゃあ通常空間に……どうやって戻ろうか？」

それはブルって門から動かなかった鬼門達が、意を決して様子を見にくるまで続いた。

第五章、ただいま、未だ見ぬ世界より（そのよん）

「結局、いつ起きるんだろう？」

異空間で暴走させた小竜姫様と死闘？　を繰り広げてから今日で丁度一カ月。

何をしているのかといえば……台所で料理を作ってるんだな、これが。

大局的に何をしているのかといえば……安らかな寝顔で「もうお腹いっぱい……むにゃむにゃ」等と言っている我が師匠、妙神山管理人、武神小竜姫様が起きるのを待っている訳だ。

「え？　何ですか？　あ、有難うございます。わざわざ食事如きで我がマスターのお手を煩わせてしまって……」

「食事は別に好きだから気にしてないよ。そうじゃなくて、小竜姫様はいつ目覚めるんだろうなぁ、と思ってさ」

平時から常時召喚状態のハルピュイアに、料理を配りながら聞いてみる。

「流石に私にもわかりませんね。マスター（王子様）がキスをすれば目が覚めるのではないですか？」

「ええ！！　何を言っちゃってるの！？　しかもルビがおかしいし！！」

「まあまあ。わりかし本気だったんですが……まあ、冗談はともかく。竜族の生態を聞かれてもわかりかねますね。マスターの『目』を使えばよいのでは？」

『目』かぁ……。

確かにわかるだろうけど、一寸気が引けるなぁ。

「でなければ、いつ目覚めるともしれない小竜姫さんを、一途に待ち続けるつもりですか！？　どれだけ愛情抜群なんですか！」

「いや、違うから。何さ、愛情抜群って？　そんな言葉ないから……」

「マスターにはやるべき事があるでしょう？　ここで時間を取っている暇はない筈ですよ？」

わかってるけど……。

「理解はされてるみたいですね。では今すぐ小竜姫さんの服を脱がせて確認を……」

「いや、待って！　いらない！　いらないから！　僕の『目』は、別に服を脱がす必要なんかないから！　ハルピュイアは知ってるよね？　そんな必要ない事！？」

さり気なく服を脱がし出したハルピュイアを慌てて止める。

「しかし、マスターが集中して『目』を使用されないと、失敗する可能性がありますから……さあ、手を離して下さいマスター。今すぐ全裸に致しますので……」

何これ？

なんでこんな事になってるの？

「わかった、わかったから……やる、やるよ」
「そうですか。わかりました。差し出がましい事をしました」
仕方ないなぁ。
実際いやいやなんだけどハルピュイアはかなり鋭いからすぐばれるし……。
「すいません、小竜姫様。発動、神の見えざる目（神眼）」
一応真剣に、僕は小竜姫様に向かって『目』を発動させた。

僕が創造神ブラフマー様から譲り受けたのは、エインヘリアルだけではない。
もっと昔に頂いた物がある。
それがこの『目』。
神の見えざる……目。神眼である。
これは全ての物を見極める事が出来る。
それは生き物も例外ではない。
今回に限って言えば、小竜姫様がどんな原因で眠り続けてるのかがわかる。と言う事だ。
……なるほど、神通力不足か。

他は問題ないみたいだな。
それなら打つ手はシンプルですむな。
「ハルピュイア、小竜姫様に神通力を補充してあげて」
「なんだ、只のガス欠でしたか。わかりました、少々お待ち下さい」
流石にハルピュイアだけでは神通力が足りない為、僕が時々ハルピュイアに魔力を送る→神通力に変換させる→小竜姫様に送る。を繰り返した。

「すみません！　私が休眠状態になっていたせいで、篠宮さん達にご迷惑を……本当に申し訳ありませんでした！」
起き上がった小竜姫様は、地面に頭がつきそうと思う位に頭を下げ始めた。
そんな姿を見ながら、僕は神通力不足で眠りに入る事を竜族では休眠状態って言うんだなぁ。等と考えていた。

「篠宮さん、こんな形になってしまいましたが、貴方は私の弟子です。いつでも、この妙神山に来て下さい。あ、勿論ハルピュイアさんもですよ」

それは、翌日、妙神山修行場の出口まで見送りに来てくれた小竜姫様の言葉だった。

「有難うございます」

「でも、小竜姫さん、一度もマスターに勝ってない……竜化した時も」

「それは……うう――いいんです！　篠宮さんなら！」

「ぞっこんですね」

全く、二人とも仲がいいなぁ。

「あ、じゃあ……一つお願いが」

「何ですか？　私に出来る事なら何でも言って下さい！　いくつでもどんな事でも篠宮さんの希望に応えられるように粉骨砕身の勢いで努力しますから！」

「必死ですね……例え、お願いを聞いてもすぐに小竜姫さんになびく程、うちのマスターは安くないですよ？」

「わかってます！　その程度の殿方だったら、私だってこんな……って、そんな事はどうでもいいんです！　私は弟子にしてあげられる事があるのが嬉しいだけです！　それだけです！　本当ですよ？　ね？　篠宮さんならわかってくれますよね？　ね？　」

何か、凄くレアな物を見ているような気がして、ただ相づちをうつだけになってしまった。

原作の小竜姫様って、こんな人……神だったっけ？

「ええっと……話を進めますよ。僕は時期はわかりませんがゴーストスイーパーになろうと思っています」

「ごおすとすいぱあ？　何処かで聞いたような……」

「陰陽師のような職業の事ですよ、小竜姫さん」

横文字がダメな様子の小竜姫様に、ハルピュイアが和風に変換してくれる。

唐巣神父も若い頃来ていた筈なんだけど……神族・魔族の人間への興味ってその位なのかな？

「ああ！　そうでした！　そうでした！　確かに篠宮さんには向いていますね」

「はい。で、これには師の推薦が必要なのです。しかし、僕には小竜姫様以外の師は（この世界には）いません」

なるほどわかった、と言う顔をする。

「推薦ですね！　そんなのいつでもしますよ！　力量も性格も、妙神山修行場として……じゃないんでしたね。私個人としても胸をはって推薦出来ます！」

「まあ、そうですよね。本人より強いんですから」

「もう！　だから篠宮さんはいいんです！」

とりあえずＯＫでいいのかな？

「では、何か必要な事があったら剛練武に伝えて下さい。出来るだけ一時間以内に対応しますから。後、はい、これ……お弁当を作りました。よければ食べてもらえると嬉しいです」

胸を張って僕のお願いに確約をくれた後、なんだかもじもじと懐から布包みを出して僕に渡してくれた。

「有難うございます。貴女のような師を持って僕は幸せですね。お弁当も喜んで頂きます」
「小竜姫さん……マスターを相手にするなら、その程度の連撃じゃあ生温いですよ。むしろ全く効果がないと言えるでしょう」
「……そのようですね。頑張ります！」

ハルピュイアはいつも思うけど、さり気なく僕の悪口を言ってない？

本当に召喚獣なのかな？

「篠宮さん、最後にこれを……」
「これは……手甲？　しかもよくお借りしていた真鍮の手甲じゃないですか。でも壊れたんじゃ……」
「はい、竜鱗の顎と言います。師として弟子に与えられるせめてもの事です。そんな簡単に壊れる武器じゃないですよ。一応人界では持ち歩きに不便でしょうから、今から神通力を通して小型化出来るようにしますね」
「何から何まで有難うございます。今からですか？　一体どんな儀式を行うんですか？」

僕には神通力はないから、神通力を込めろ！　とか言われたら困るなぁ。

「そんな……いや、あの……あ、それ、は……凄く簡単です！　あの、一寸だけで構いませんので、目を瞑っていてもらえませんか？」
「はい？　ええ、いいですよ」
見られたら困るものなのかな？

見られたら困るけど、目の前でやらなくてはいけない事……サー

ヴァントのマスター登録みたいなものかな？

あーあ。と言った、ハルピュイアの溜め息的なものが聞こえてきたが、僕には意味がよくわからなかった。

そして、気配が近づいてきたかと思う、と額に暖かい感触が一瞬だけ感じられた。

驚いて目を見開くと、そこには頬を紅色に染めた小竜姫様がいた。

「あ！　あの！　私の竜気を与えました！　これでここ（妙神山）にある全ての武具を召喚……って！　篠宮さん！！　どうしたんですか！？」

小竜姫様が早口に何かをまくし立てているが、僕はそれを聞く余裕ははなかった。　突如として、体を引き裂かれるような痛みが襲っていたからだ。

「篠宮さん！　どうしたんです！？　篠宮さん！」

「小竜姫さん、どいていて下さい！　マスター！　クロウ様を喚んで下さい！」

「ハ……ルピュイ、ア？」

「早く！　急いで下さい！」

急にまくし立ててくるハルピュイア。

訳がわからない。

内容が頭に入らない。

痛みで意識が飛びそうな状況でだったので、脊髄反射でクロウを召喚する。

「クロウ様。宜しいですね？」

「クアア！」

「では……旋風の精霊にして、召喚士、シズマ＝ラインズが従者、ハルピュイアが命ずる。行き場無き力の渦よ、優しき風と共に竜種足る従者、クロウへ移行せよ！」

まるで熱暴走のようにヒートした力は、ハルピュイアの文言と共に徐々に減少していった。

同時にクロウの姿も無かった。

どうやら僕の中に戻ったみたいだ。

「はあっ、はあっ、はあっ……」

「なんとか間に合いましたね。大事ないですか、マスター？」

「はぁ、はぁ、あ、ああ……なんとか……」

肩で息をしながら無事を伝える。

「あの……篠宮さん……私……そんなつもりじゃ……」

「いや、小竜姫様が気にされる事は、ありません……よ。これは僕の問題ですから」

暫く体を落ち着かせようと、深呼吸を繰り返す。

すー、はー、すー、はー。

よし、落ち着いた。

今回の原因について振り返る。
まあ、今回の原因ははっきりしているんだけどね。
僕の竜の因子が、小竜姫様の竜の因子に拒絶反応が出た為だ。
そもそも僕が自分の力を秘密にしていたせいだし、小竜姫様は１００％善意から申し出てくれたんだ。
何で責める事が出来ようか？
「篠宮さん……私は……ぐすっ……うう……」
「ええっ！？　何で泣くんですか！？　し、小竜姫様？」
見ると、小竜姫様はその場で座り込んで号泣していた。
訳が分からない。なんで小竜姫様が泣き出すの？
「マスター。マスターはいつも非常に優しいです。
しかし、時には優しさが苦痛になる時があるんですよ。
この状況で説明はなし、明らかに原因となっているのに責める事もない。
責められるより遥かに辛いでしょう。ねぇ、小竜姫さん？」
「……えぐ、えぐ……わ、私、私が悪いんですよね……じゃあ、はっきり……ぐすっ……教えて、下さい。私に、篠宮さんの……」
そうかぁ。小竜姫様が責任を感じないように、と思ったんだけど……逆に罪の意識を感じさせるとは思わなかった。
「わかったよ。有難うハルピュイア。すみません小竜姫様。僕の不徳故に、余計な気を使わせてしまって……僕の推測、聞いてくれま

すか？」
「……いいんですか？　私が聞いても？」
「勿論です。僕が聞いて欲しいんです」
「篠宮さん……有難うございます」
「喧嘩後の夫婦のようですね」

ちゃかすな。全く、すぐ僕をネタにするんだから。

そして、小竜姫様には僕が竜の因子を持っている事、小竜姫様のそれとは合わなかった為に起きた現象である事を説明した。

「本当にすみません！　私、篠宮さんの助けになれば、と思って竜気を送ったのに……」
「いえ、黙っていた僕も悪かったんです。僕は何ともありません。どうか、あまりお気になりませんよう……」

その後の事は僕にはわからない。
痛みでそれ所じゃあなかったから。

故にハルピュイアに後の事を確認する。

「分かり易く言いますと、マスターの体の中に複数の混じり合えない力が渦巻いていた訳です。
そのままでは、幾らマスターが規格外な存在であっても、致命的な負傷をしたでしょう。なので、元々竜の適性を持っていたクロウ様に、小竜姫さんの竜気を肩代わりさせてもらいました」

小竜姫様は事の大きさに、僕はクロウのあまりの汎用性に驚いていた。

「発動、召喚、クロウ！　早速だけど……有難う。君のおかげで助かったよ」
「クロウさん。本当に有難う御座いました。なんてお礼を言っていいのか……」
当然の事をしたまでだぜ！　とばかりに、ご機嫌に空を滑空するクロウ。
本体のない影みたいなものだから、意志はない筈なんだけど……。
電磁砲や羽ばたきから発せられる衝撃波を放ちまくるクロウ。
意志はない……筈。　クロウの空中一人大戦争は、放った電磁砲が妙神山の結界に反応して、自らを貫くまで続けられた。
……。

怪我等ではなかった為、一日だけ出発をずらして鋭気を養ってから、僕等は妙神山を後にした。
昨日とは別の意味で涙を流しながら、小竜姫様は僕等を送り出してくれた。
勿論鬼門達もだ。
あれで中々洒落のわかる二人だった。

小竜姫様の、私の計画が一段階前進しました。の発言の意味はわからなかったが、いい友人や師を持って僕は幸せだなぁ。と、この世界のあり方に感謝していた。

「マスター、そろそろ宜しいでしょうか？　お知らせしたい事が……」

奇遇だな。僕も確認したい事があるんだ。

クロウを召喚して、全てを防御するよう伝える。

不満そうに鳴くがそんなのは知った事じゃない。

「発動、投影、ダーク。じゃあ……行くよ！」

投影魔術でダークを創造する。

やはり魔力が減るか……僕の想像通りかな、これは。

槍投げの要領で、勢いをつけてダークを投擲した。

ハルピュイアはその間一言も口を挟まなかった。

「くぁあ！！」

「……やはり……か」

ダークが直撃する瞬間、クロウの前方に風が収束しダークを霧散させた。

「有難う、クロウ。じゃあ、次は……クロウ、発動、竜炉心！」

「……クァア！」

クロウの一声で、僕の減少した魔力が即座に全快する。
「うん、僕の仮説通りだね。ご苦労様クロウ……送還！」
クロウが僕の中に入るのを待ってから、ハルピュイアに確認していく。
「ハルピュイア、今でも僕は竜種なのか？」
「恐らく全てがご高察の通りかと。今のマスターは竜種ではなく、神の因子を持った人間です。原因は……」
「僕の竜の因子である竜珠。竜炉心がクロウに移譲したから……そして、その原因は……」
「私の行った儀式スペルのせいですね」
なんて言うか……１００％予想通りだなぁ。
「先程確認されていましたが、マスターのスキルは消えた訳ではなく、クロウ様に移動しただけですので、クロウ様が現界していれば行使可能です」
「神眼で自分を見れないのが惜しいね。ま、問題無さそうだし、いいか」
ブラフマー様から譲り受けた神眼、神の見えざる目。は、自らとそれに類するものは見えない。
つまり、自身の召喚獣もそれに該当する訳だ。

「ハルピュイアも言ったように、竜炉心は無くなった訳じゃないし、僕がやる事が変わる訳じゃない。皆忘れてるかもしれないけど、僕は超前衛職じゃなくて後衛職の召喚士だからね」
「ああ……失念していました。私達より遥かに強くて、私達より遥かに攻撃的で、明らかに前衛よりの行動を取っていた為……」

なんだかなぁ。

少しだけ苦労するかもしれないけど……ま、いいか。

そんなこんなで、僕の妙神山修行、そしてこの世界の第一歩は終わった。

主人公及び仲魔ステータス一覧（そのに）（前書き）

変更点は直接追加・変更してあります。
重複する分もありますので、よろしくご了承下さい。

主人公及び仲魔ステータス一覧（そのに）

※スキルの威力は、魔力及び各種ステータスにより変動する為、基礎値のみ表示する事とする。

主人公及び仲魔ステータス一覧

シズマ＝ラインズ
（静馬篠宮）

レベル９９

ＨＰ　７８４
ＭＰ　１２３０

力３５
魔４７
体３１
速５０
運２３

固有スキル

エインヘリアル
〔マスターが契約する全ての仲魔のレベルを熟練度、スキルダメージを×２アップさせる。及び、このスキルを持つマスターの召喚獣は常時レベルが＋１０される〕

竜炉心
（ドラゴンハート）
〔竜属性、竜族の証、竜珠。効率的に魔力及び気術を返還する。返還効率１対１００。
※使用制限、召喚獣クロウ現界時のみ〕

竜の羽ばたき
（ドラゴンウイング）
〔風・竜属性。自身及び周囲の全属性ダメージを３００吸収する。他者、範囲を拡大するとその吸収率はダウンする
※使用制限、召喚獣クロウ現界時のみ〕

竜の殺息
（ドラゴンブレス）
〔光・竜属性。対象に威力３５０の後に追加１３０×１〜５０の魔力ダメージを与える。※使用制限、固有結界、力無き弱者の歌発動時、召喚獣クロウ現界時のみ〕

真名解放
（マスターオブドラゴン）
〔竜属性。竜炉心に込められた竜の力を解放する。
※使用制限、固有結界、力無き弱者の歌発動時のみ
※使用制限、召喚獣クロウ現界時のみ、対象は召喚獣クロウ（鴉）のみ〕

格闘術
（気孔弾、コンボ、タックル、短勁、バックハンドブロー、乱撃、スピンアタック、空鳴拳、双竜脚、夢想阿修羅拳、ファイナルヘヴン）

剣術

託された友愛の剣
（吉備津天地刀）
〔光属性。対象に威力２００の魔力ダメージを与える〕

光射す竜の咆哮
（竜鱗の顎）
〔光・竜属性、対象に威力６０の気力ダメージを与える。
※使用制限、竜炉心発動時のみ〕

魔術

召喚術

契約召喚獣
・クロウ（鴉）
・ミリア（ハウンドウルフ）
・ハルピュイア（旋風の精霊）
・剛練武（幻獣）

・禍刀羅守（幻獣）

投影魔術

固有結界
「力無き弱者の歌」〔現実を浸食する心象世界を具現化させる〕

無駄なしの銃
（フェイルノート）
〔光属性。威力１～１２０の魔力ダメージを与える。魔力で創造した銃。スキルや魔術を込める事が可能。※使用制限、召喚獣ミリア媒体時のみ使用可能〕

気術

天術
〔気術と魔術を融合させた無の力。　全ての天術は、シズマ＝ラインズが使用した場合に限り威力が＋３０される〕

柔剛相交
（ワレモチウルチカラヲアワセマジワラン）
〔無属性。天術。威力４００の無属性ダメージを与える。このスキルは対象の如何なる防御スキルを無効化する。
※使用制限、早風、創造時のみ〕

早風
〔無属性。天術。天術により創り出した無の刀。　威力２の無属性ダメージを与える〕

ヒヒイロカネ
〔無属性。天術。格闘状態の際に、基礎ダメージが１、５倍される（このダメージは如何なる軽減・無効も無効化させる）〕

神の見えざる目
（神眼）
〔光属性、鑑定・未鑑定状態に問わず、全ての対象の情報を得る事が可能。生物・無機物すら問わない。しかし、自身、もしくはそれ

に類するものは該当しない〕

真・超電磁砲
（ハイレールガン）
〔電撃属性。威力１２０の念動ダメージを与える〕

影分身の術
〔疾風属性。自身及び自身の所有する武具を複数複製する。※分身体の耐久度は１、威力は３０％となる〕

使用不可スキル
カリバーン
王の財宝
超電磁砲
空想具現化
壊れた幻想
一部投影魔術

召喚獣

クロウ
（鴉）

レベル４５→４６
ＨＰ１２２→３３１
ＭＰ３５→１０８

力１２→２２
魔１１→２１
体８→１８
速３５→４５
運３→１３

固有スキル

突撃
〔無属性。威力５の物理ダメージを与える〕

羽ばたき
〔衝撃属性。範囲に威力１０のダメージを与える〕

電磁砲
〔電撃属性。威力１５の念動ダメージを与える〕

竜炉心
（ドラゴンハート）
〔上記同様〕

竜の羽ばたき
（ドラゴンウイング）
〔上記同様〕

真名解放
（マスターオブドラゴン）
〔上記同様〕

ミリア
（ハウンドウルフ）

レベル１３→１８
ＨＰ８３→１１０
ＭＰ４４→５１

力７→９
魔１２
体９→１１
速１３→１４
運１０

固有スキル

突撃
〔無属性。威力５の物理ダメージを与える〕

体当たり
〔無属性。威力７の物理ダメージを込与える〕

ブフ
〔氷結属性。威力５の魔力ダメージ＋一定確率で氷結効果を与える〕

無駄なしの銃
（フェイルノート）
〔上記同様〕

ハルピュイア
（旋風の精霊）

レベル２７→２９

ＨＰ１７１→１８１
ＭＰ１２０→１３２

力９
魔２１
体８
速２９→３０
運１５→１６

固有スキル

フェザーブレッド
〔疾風属性。威力３５のダメージを与える〕

羽ばたき
〔衝撃属性。範囲に威力１０のダメージを与える〕

ガル
〔疾風属性。威力５の魔力ダメージを与える〕

マハガル
〔疾風属性。範囲に威力５のダメージを与える〕

ザン
〔衝撃属性。威力５の魔力ダメージを与える〕
剛練武
（幻獣）

レベル１１

ＨＰ３５０
ＭＰ１５

力１７
魔４
体２０
速３
運８

固有スキル

媒体選択
〔召喚時に媒体（近くにある元素）により素体・スキルに変化がある〕

再生能力（弱）
〔神界・人界で一定時間経過毎に少量のＨＰが回復する〕

再生能力（中）
〔妙神山で一定時間経過毎に中量のＨＰが回復する〕

禍刀羅守
（幻獣）

レベル１１

ＨＰ２１４
ＭＰ１８

力１３
魔６
体１５
速１８
運４

固有スキル

形態変化
〔動く刀（リビングソード）・通常形態に変化可能〕

串刺し
〔無属性。威力６の物理ダメージを与える〕

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9387w/

神は哀れな子羊に慈悲を与える

2011年11月19日20時29分発行